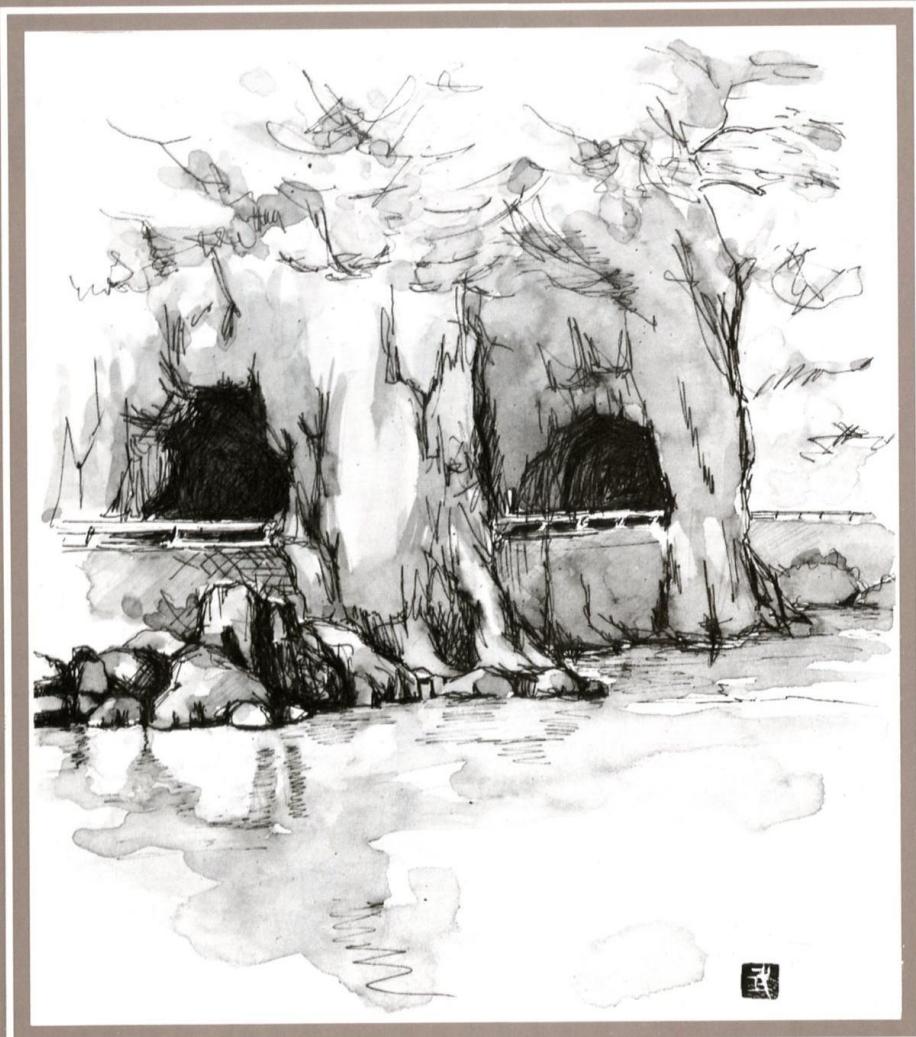


やまとき文化

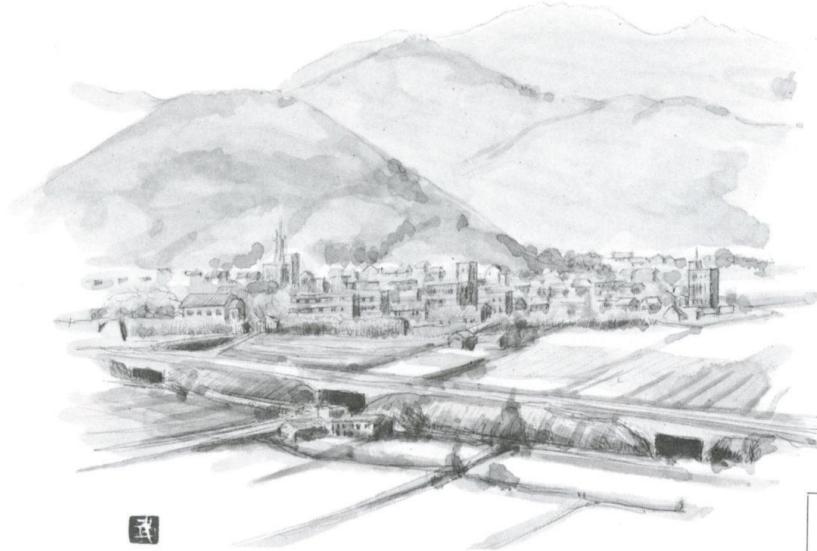
'87-2 * No.6



山崎町文化連盟

『地域の文化活動』

山崎町文化連盟会長 壱阪壽



山崎にはたくさんの文化グループがあり、それぞれのグループが、各方面に亘り非常に活発な文化活動を展開されています。

そのような活動が此の町の生活を一層豊かなものにしています。現代のように物質的には恵まれ過ぎた社会になりますと、ややもすれば物偏重の風潮になってしまって、一番大切な精神の面、心の面を見失いがちになってしまいます。そんな時代の流れを防ぎもつと心豊かな生活をするためにも、国全体はもとより地域社会においても文化活動が大いになされなければなりません。特に地域の文化活動にあつては、限りなく中央の文化に近づけるといったことではなく、其の地域の持つていて独自のものを引き出してきて育ててゆくといった様な文化活動でありたいのです。

やまとさき文化

★ 目 次 ★

地域の文化活動

2 3 2 10 8 3 13 20 19 19 18 18 17 17 16 16 15 15 14 13 22 23 24 24 25 25 26 26

壱阪壽
浅田耕三
根岸元彦
安井道夫
藤村省三
庄和夫
原田小次郎
平松幹司
芦田八重
小畠ぬい
安井清介
田口獎撰
上山宗枝
池田大典
井口武一
杉元正輝
北川博敏
藤村清一
高野圭介
宇野裕章
福山清一
宇野裕章
前田昇

晏嬰
隨想
阿修羅のこと
◇ 各部寄稿 ◇

短歌 新樹短歌会の人々
御茶の心一端
俳句 第五回山崎町俳句大会
五百羅漢吟行
春浅き常福院を訪ねて
楽しい対話のある会
郷土研究会近況
吟詠芸術
カヤ葺の屋根
忙中閑を持つ
土蜘蛛の巣
勝負のこころ
特別寄稿 日本人と果物
ハス酒のこと
初心
巨星墜つ
中国美術交流展を顧みて
古典芸能に灯を
郷土芸能・宇原の獅子舞
御念の入りて、ご大義
事務局便り
編集後記
表紙題字／尾崎正一
表紙題字／洞門
表紙題字／田中
表紙題字／武
根岸元彦
根岸元彦
元彦
前田昇

晏
あん

嬰
えい

山崎文学会 浅田耕三

午后の作業を割当てられて浜田虔二達は学校を出た。三キロの道を歩いてK—駅へ向かう。

駅に着くと班長の小島が、一人事務所へ入つていった。すぐに帽子に金と赤の模様の入った助役が出てきて、六人を引込線の脇の倉庫へ案内した。

「もうすぐトラックがこの下へ着くからね。そしたらその荷をここへ運び込んできちんと積んで下さい。そうね、場所は右の隅のここにしてもらおうか」あれこれ指図をしておいて倉庫を出でていった。

トラックはそれから十分程して駅に着いた。虔二達はその積荷、重さ十五、六キロのドンゴロスの大豆袋を、トラックの助手に一つずつずりりと肩に載せてもらつては急な石段を登つて倉庫へ積み上げた。

作業は十分余りで終わった。

次のトラックが来るまで用事はない。六人の中学生は倉庫のコンクリートに秋の陽射しを避けて腰を下ろし、ホームを眺めた。下りのホームに十一、三人の乗客が立つたりしゃがんだりして列車の到着を待つている。

駅の向こうの山から線路越しに吹いてくる風が、汗ばんだ膚に心地よい。すぐに下りの列車が入ってきた。窓にもデッキにも人が詰まっている。列車が出てしばらくして、やつと二台目のトラックが来た。

それつきりトラックは途絶えた。近在の村からこのK—町へ入る道路には坂道が多いから、どこかの上り坂で多分、エンストでも起こしているのであろう。何しろガスマキと呼ぶ、薪を短く切つたのを燃料にして走るトラックである。全部で七台、三時半までには駅に着く予定だと、虔二達は金色帽子から聞いていたのに、この分だと作業のおわりはいつになるのか予測もつかない。

六人は手持無沙汰にホームへ、ホームの向こうのわずかに色づきかけた山の方へ視線を投げた。人影はなかった。

次は三時四〇分発の上りだが、これは貨車だ。いや、貨車に二輪だけ客車がついている貨客混合列車だが、このK—駅には四十五分間も停車する。だから乗客はまだ誰も来ていない。

「腹が減ったなあ」

倉庫の壁にべつたり凭れかかって、尾崎がげんなりした声で呟く。

「ああ、減った」西井が応じた。

「生の大豆、食えんか」

「ふん、食えんか、やっぱり」

溜息まじりの尾崎の声をきくと、虔二までにわかに空腹を覚えた。

尾崎の溜息は、大豆が生だから食えんというだけではない。嚴重な梱包のいかんともなし難いことを知つた、絶望の呻きなのだ。

ずっと西の方に、紺の作業衣の鉄道工夫が三人、つるはしを振り上げて仕事をしている。そのこっち、ホームの一番端の、松丸太を積み上げたあたりに、何人かの駅仲仕がのろのろ動いているのが見えた。

「おい、ほんやりしておつても仕様がないし、あれ手伝いに行くか」

小島が言つた。小島はクラスでも一、二の精勤者である。

「やめとけ、やめとけ。よけいに腹が減るぞ。それに、またぼろくそにいわれるだけじや」

すぐ尾崎が反対した。さつきとは別人のような声だ。

「そやそや、わし等は言われた事だけしてたらえんじや」

虔二も他の三人と一緒に尾崎に同調した。駅仲仕達と一緒に仕事すると、中学生はまるで小僧扱いでいつも馬鹿にされる。

六人は、国鉄の支線に沿つたこの小さな山間の町にある中学校の四年だった。
「学校戦時勤員体制」というのが昭和十八年にでき、翌十九年の六月から彼らは一日も教室で勉強した日がない。山の開墾や工場勤員、近郊農家の養蚕や農作業の手伝い、製薪製炭作業、駅の積荷、運搬から、はては数十キロ離れた大都市の空襲の焼跡整理まで、あらゆる作業にかり出されている。日曜も二週目にやつと一回。

この日の午后、虔二の班六人は、近在の農家が供出した大豆を、トラックから駅の倉庫に積み込む仕事を命じられた。

「おい、上りが入ってきたぞ」

井上が言つた。

長い貨車が上り線へ入ってきた。真中の客車二輪の他は、真黒に焼けた有蓋車と無蓋車を連結した二時五十五分着の列車である。

「おい、あれは何じや」

突然、尾崎が立上がつて指さした。他の五人もそつちを見た。

「ありやアメリカやぞ。敵兵じや」

「へええ、アメリカ？ アメリカの捕虜か——」

停車した二輪の客車のすぐしろの無蓋車に、三人の男が乗つている。それがどう見てもアメリカであつた。

「ほんとか、おい。あれ、アメリカか」

六人はなぜという事もなく、倉庫の入口の大好きな板戸に半分身を隠すようにしながら、息をのんでそつちをみつめた。

「距離」〇メートル、撃てッ」

剽軽な矢杉が銃を構える真似をして突然叫んだ。が、誰も笑わない。それ程、無蓋車のその三人は、六人の中学生にとって思いもかけぬ見ものであつた。あつけてとられて六人は見られた。

というのは、テント布のような萌黄の軍服を着た三人がひどく若く、まだ二十歳そこそこで、そしてとてもなく陽気で放恣だったからだ。足を投げだし、無蓋車の側板にもたれ、そんな格好で、大声でしゃべり、鳶色の瞳をぐるぐる動かし、まわりを見回しふざけ合いさえしている。

まるでこれから町へ恋人と映画か野球見物にでも行くような浮かれようで、そのうち一人が、自分達を見ている倉庫内の虔一達をみつけると、やにわに手を上げて口笛を吹いた。

「おい、やばいぞ」

手を上げたのが明らかに自分達に向かつてだとわかると、尾崎がいち早く叫んで倉庫の奥へかけ込み、他の五人もあわててあとにつづいた。が、考えてみると自分達が逃げ隠れることはなかつた。で、またのこのこ出てきて外をのぞいた。

三人はもう虔一達には眼もくれず、血色のよい頬と金髪を秋の陽に輝かしながら話に興じている。

改札をすませてホームを歩いてくる乗客が、うしろの貨車の三人が目に入ると、一様に足を停めてびっくりした顔で見ている。

「曳かれもんの小唄じやぞ、あれは」

「うん？ ひかれもん」

「そうじや、足元見てみい。チエーンで繋がれとるやろ。縄つきが曳かれていかながら、小唄をうたつて平氣をよそおう。捕虜の虚勢、つまり曳かれもんの小唄じや」

小島は整然と説明してくれたが、虔一は首を振つた。

あれが虚勢？ そんな事があるものか、と思った。たしかにそれぞれの片足にチエーンが巻かれ、端が貨車のロープを通す鉄製の輪に結ばれているらしいが、三人には曳かれ者の暗さも虚勢の不自然さもまるでない。腹の底からの陽氣さだ。

だが、それにしてもほんとにあれがアメリカ兵だらうか。虔一は狐につままれた気持ちがまだ治まらない。いや、おさまるどころか、見れば見る程、そんな疑念が嵩じてくる。

アメリカと戦争をはじめてから、虔一の目や耳を通して入つてきた米英人なるものは、いかつく大きく、碧眼紅毛、まさしく鬼であつた。たとえば彼は先だつて寮から帰省した際、父のとつている唯一の雑誌、「家の光」でこんな記事を読んだ。——アメリカ人というのは、女でも、裸で殴り合う拳闘を喜んで見る。選手が血まみれになればなる程興奮して、キーキー歎声をあげる。それ程アメリカ人とは残虐な人種なのだ、と。

が、今、眼の前に見るそのアメリカは、何のことではない、短く角刈りした金髪と鳶色の眼で無邪気に騒いでいる青年ではないか——。

「おい、G——が来たぞ」

誰かが言つた。改札からホームへ上がる石段の所が急に暗やかになり、七、八人の女学生が姿を現わした。G——とは女学生のことだ。彼女らがどんな反応を示すか。が、見つけたのは彼女達より相手の方が早かつた。一人が高らかに口笛を吹いたと思うと、少女の一団に手を振りあげ甲高い声で呼びかけた。女学生は驚いて何んだが、たちまち身を翻して客車の中へ姿を消してしまつた。

「おい、ありや豪州兵じゃそな。なんでや知らんが、今、駅長が電話しとるの、きいてきた」

便所へ行つてきた矢杉が、帰つてくるなり言つた。

「へええ、豪州兵？」

あらためて三人を見た時、虔二の視野に一人の男が飛び込んできた。

「松尾——」

「えッ松尾？」

五人が一齊に見た。まさしく松尾だつた。草色の将校服の長身に、腰の長剣が似合つてまことに格好よい中尉が、大股にホームを歩いてくる。

「奥へ隠れるか。敬礼するの、面倒臭いやろ」

尾崎が言つたのをはねかえすように、不意に小島が号札をかけた。

「敬礼ツ」

五人はびよんと立上がり、線路越しに松尾に向かつて拳手の礼をした。

何しろ鬼の松尾だ。

三人の配属将校の中では一番若い、学校中で一番怖い教官。三人のうち寺坂中尉は兵隊上がりの将校で、頭もみごとに禿げあがつた五十に近い年配だし、もう一人の石井中尉は幹候出身の同じK—中学の先輩で、漢口かどこかの一番乗りを果たした程の猛者であったが、中国戦線を転戦して、今は予備役の配属将校である。

虔二が入学した頃は、軍事教官も寺坂中尉の下に、ヒゲ曹と呼ぶ曹長が一人いただけだったが、戦争が烈しくなった今は、将校だけで三人も派遣されてきている。そのうち半年前に着任した松尾はまだ二十四、五で、一八〇センチの長身と色の浅黒い精悍な面、鋭い眼光はそれだけでも生徒達を威圧したが、その教練がまたとてもなく苛烈であった。

ある時など、五年生の一クラスの軍事教練を指導していた彼は、十分の休憩時にグラウンドに並べていた叉銃と機関銃の間を、一人の生徒が不用意に通り抜けるのを目ざとく教官室の窓から見つけるや、軍帽の下の日除けをひるがえして飛びだしてきました。

集合ツ、グランド中に響く大声でクラスを集めると彼は四列の体操隊形に生徒を散開させ、いきなりズボンをとれッと命令した。とまどう生徒達を怒鳴りつけズボンを脱がせシャツを脱がせ、全員パンツ一つの裸体にし、そして灼熱の運動場に正

座させた。炎天と地熱にあぶられながら生徒達はそこに三十分間坐らされ、そして松尾も軍刀ついて無言で隊の正面に立ち尽くした。熱さにまらず、足に火ぶくれまでこしらえたもの、ぶつたおれるものが半数近くもあった。

敵前渡河と称して服のままK—川を泳がすやら、重装備で早駆けをやらせるやら

松尾の訓練は、万事そんな調子だつた。

そしてまた驚いたことに、この中尉は東京帝大出であった。

東京帝大出といえばこの中学には、他に大村という数学の先生しかいない。この先生は少し事情があつて、東京一中から一高東大出身であつたが、卒業後健康を害して三年間の療養ののち、田舎の中学の先生になつたときいている。

「松尾が東京帝大出？」

初めてきたものは皆、眼を丸くした。が、これは事実であつた。舎監の、若い

数学の先生から虔二も直接聞いた事がある。

「東大いうても印哲なら誰でも入れるのや」

中には知つたかぶりでそんな事をいう者もいた。

「印哲って何や」

「印度哲学科」

「ふーん、そんなら松尾はその印哲か」

「いや、それは知らん」

彼が印哲かそうでないかは若い舎監も教えてくれなかつたが、もしそうなら印度哲学なるものがあの激越な、氣狂いじみた軍事教練とどう結びつくのか虔二などには皆目分からない。

とにかく、十二月初旬の姫路師団派遣の査閲官の来校が近づくにつれて彼の教練はますます熾烈になり、身の回りに漂う一種の凄壮さが、生徒達を怯えさせた。そしてその凄壮さは、深刻化する戦局とは、多分無関係ではなかつたに違いない。

すでに一月にサイパンが玉砕し、七月には東条内閣が総辞職し、粗悪な紙質の新聞紙上には神風特別攻撃隊の活躍の文字が躍っていた。

軽く答礼した松尾中尉は、カツカツと長靴の音を響かせてホームを歩いていく。

虔二達は固唾をのんでうしろを見送つた。あの三人にどんな反応を示すか、いきなり軍刀を抜いて斬りつけるのではあるまいか、かすかにそんな危惧さえ持つた。中尉は案の定三人を見ると、そつちへ歩いていった。腰の軍刀をきちんと左手で

押さえ、ホームに仁王立ちになつた。

ふさけ合つっていた三人は急に静止し、凝視した。何かの危険を本能的に察知したのかもしれない。次の瞬間、一人がひたと中尉をみすえ、大声で何事かまくして始めた。何を言つているのか、離れているし處二の語学力では見当さえつかなかつたが、彼等の顔にはありありと敵意があらわれていた。と、こんどは松尾中尉の低い声が応じた。底力のある声が二言三言、そしてくるとくびすをかえし、腕時計を見た。上げた視線がふいと處二達をとらえた。磨き込まれた長靴が軽々とホームを飛び下りて線路を横切る。

「何の作業をしている」

引込線の枕木の上に立つてきいた。

「はいッ、供出大豆の荷積みをやつております。只今、トラックの到着を待つてい
る所です」

すばやく班長の小島が自分も倉庫から飛び下りてこたえた。教官を上から見下ろ
す非礼にすぐ気付くころなど、やはり小島であった。彼は精勤賞というニックネ
ームがついている。軍隊で軍務に精励すると精勤賞をもらえるそうで、もしここが
軍隊なら当然小島は、その賞の第一該当者という事でついた名だ。

處二達の頭には寝ても醒めて兵隊がある。数年先にはいやおうなくとられる兵
隊であった。どうせ行くなら、早々に予科練や特幹を志願していく者も多い。小
島なら精勤賞どころか、一選抜で甲種幹部候補生に選ばれ、見習士官から将校にな
るだろう、と處二はやはり羨望を抱かずにはいられない。

「うむ、小島か。ご苦労」

さすがに彼の顔は、この帝大出の配属将校にさえ憶えられていた。明解な彼の答
えに満足そうに頷いてから、松尾中尉は全員下りるように命じた。

「整列ッ」

小島が号令をかける。一列横隊に並んだ。

「お前達にたずねる」

中尉はぐつと六人を見回した。

「あの貨車に繋がれた豪州兵捕虜を見てどんな感想をもつたか、それがききたい。
左翼のお前からだ」

いきなり指名されて處二はどきんとなつた。咄嗟の事で何の用意もない。

「はいッ、びっくりしました」

「びっくりした？ 何を驚いたのか」

「アメリカ兵、い、いや豪州兵など、見たのは——は、初めてですか？」

「口ごもり、声がかすれ、視野が白くなつた」

「それだけか」

「はいッ」

中尉はじろりと處二を見た。その眼にあからさまな侮蔑の色が光っていた。殴ら
れるツ、と瞬間、處二は怯え、身を固くした。

「弱兵だ、貴様は」

早口に呟いて中尉の視線は隣の尾崎に移つた。

「お前はどうか」

「敵兵といつても案外弱そうと思いました。自分は今まで、奴等はもつと軀がご
つい、力の強そうな人間とばかり思つていましたが、あれなら白兵戦になつても勝
てそうな、いや勝てます。勝つ自信がわきました」

「よしッ、その意気だ。貴様はなかなか見どころがあるぞ。うん、鍛えようによつ
ては優秀な兵隊、指揮官になる。だが奴等をあなどつてはいかん。油断は禁物だ。

特に指揮官にとって必要なのは、骨を斬らして命を断つ必勝の信念と共に、冷静な
判断力だ。どうだ、わかるか」

「はいッ、よくわかりました」

「貴様の名前は？」

「はい、四年三組、尾崎利夫であります」

名をきかなくても胸に大きな名札をつけている。が、松尾は、気に入つた生徒に
出くわすと、名をきくという噂があつた。

尾崎は普段怠け者の癖に、こんな時は実にうまくやる。これで彼の「教練優秀」
はまず間違いないまい、そしたら幹部試験も……。處二がちらつとそんな事を頭に
うかべていたら、三番目の西田が尾崎と同じ事を答えた。

「猿真似するなッ馬鹿者ッ」

松尾は一喝した。そしたら次の矢杉も井上も同じ事を考へていたと見えてしどろ
もどろ。しかし最後にこたえた右翼の小島は、さすがに違つた。

「捕虜という最大の辱しめを受けながら恬として恥ずかしがる様子もないあの者達

の心は、ぼくにはわかりません。やはり毛唐は毛唐、品性下劣です。日本人なら絶対生きてはおりません」

うんうんと、さもわが意を得たといった顔で松尾中尉は大きく頷いた。

「よいか、虜囚の辱しめを知らぬ奴は兵隊どころか人間でさえない。それがいかに醜くあわれであるかよく見ておけ。どれ程物量を誇ってもあんなのに日本が敗ける筈がなかろう。あれを衆目にさらした人物も、多分そのへんを慮つての事だ」

四、五分演説しておいて、中尉は客車へ消えた。

トラックはやはり来ない。所在ない六人はまた倉庫に上がり、コンクリートに座つたが、視線はすぐ三人の方へいく。

「おい、狸やぞ、今度は」

「——狸？」

五人はホームの東端に眼を移した。なるほど、やや古ぼけてはいるが、黒いサージか何かの服をきちんと着こなした小柄な男が、ひよこひよこホームを歩いてくる。

狸——、岡田という物象の先生である。ひどく背が低い上に色が黒く、だから風采はあるがらぬが目に何となく愛嬌があつて、メキシカン・ハットでもかぶらせれば随分似合いそうな先生、そこから狸という渾名を進呈されているが、この先生はそのニックネームに似合わず至極ダンディであった。いつもハイカラーやつけ、きちんと身上に合つたスーツに趣味のよいネクタイをしめ、とにかく教師仲間のうちではしば抜けて服装が垢抜けていた。けれど、田舎中学教師には珍しいこの伊達者も惜しいかな、その矮軀のゆえにさほどには目立たない。

しかし博識であった。ある時、漢文の自習監督にきて、物象の教師が「管晏列伝」の「晏平仲嬰之御馴者」の白文の何章句かを、堂々とそらおばえで黒板にかき、滔滔と一時間しゃべつていったのは驚いた。身の丈九尺の御者の妻の話もおもしろいが、使した燕王とのやりとりの話も愉快で、ふだんやっている論語や唐の五絶七絶などの漢詩よりずっと話がいきていた。

たいしたもんや、とあとで皆感心していると、

「おい、何の事はない。六尺にも足らん小男が、大男よりずっと上や、という話やないか」

一人が言つたから、なる程とみな初めて気づいて大笑いになつた。斎の宰相晏嬰は知略縦横の名宰相だが、背は六尺（当時の中国の六尺は一三五センチ）にも足ら

ぬ小男であった。

戦争がひどくなつた近頃ではあまり見かけないが、虔二達が一、二年の頃、この先生は放課になるとよく猟銃を担いで、犬を連れて山へ鳥撃ちに行つてゐた。

その肩や腰に房のついた狩猟服にコールテンの薄茶の鳥打帽がまた粹であつた。

肩の二連銃も英國製だという噂である。

その頃の中学校の先生というのは至つて暢氣で、放課になると宿直室で碁を打つたり釣竿を担いで川へ行く先生もあつたが、岡田先生のは、川釣の麦稈帽などとは比べものにならない。

多趣味の人で洋楽のレコードを蒐集したり、マンドリンも弾くという。

その岡田さんが、例の紳士然とした身なりで、ホームをとことこやってきて、目ざとく貨車の三人を見つけた。

しばらく立停まつて見ていたが、何思つたか、つかつかと先生は三人の前へ歩いていた、と思うと、獨得の甲高くて少々鼻にかかるが、いつも授業できいていた

声が聞こえてきた。

「へええ」虔二達は呆れて見詰めた。よくはわからぬが、かなり流暢な英語であつた。三人の捕虜がかわるがわる応じてゐる。大仰な身振りで肩を上げたり床を踏みならしたり、松尾中尉への反応とはまるで違つてゐた。メキシカンを思わす先生の横顔もわらつてゐる。

多分、三人の虜囚を狗の如く貨車に繋ぎ止めた監視者は、客車の中に虎の威を着て、傲然と軍刀などついて、髭でもひねりながら窓越しに睨みつけてゐるであろう

山間沿線に、かくも流暢に英語を駆使し、しかも権力に背を向けた人間などいる筈がないと多寡をくくつて居眠つてでもいるのであらうか。

「小島、憶えているか」
茫然と見ている横の小島に虔二はいった。
「うん？ 何を」
やつたか狸が話してくれたやろ」
松尾中尉にドジな答をして内心くさくさしていた虔二は、なんだかひどく愉快になつてゐた。

隨想

アメリカ 想

山崎文学会

根岸元彦

で安心する。

日本を発つたのが二日の午後七時頃で、到着したのが同じく二日の午後三時頃、日付変更や時差の関係でそんなことになる。機内では飛び立つて暫くすると夕食、少しうとうとしていると朝食、到着すると昼食といった具合で、何だか飲んだり食つたりの間に真昼のアメリカに放り出されるから、混乱して時差ボケを引き起こすらしい。私は初めから終りまで酔つ払つたり居眠りばかりで、どうやら時差ボケの恩典には浴きなかつたようだ。

アメリカでは息子の家に半月ばかり滞在して、息子の案内でカリフォルニア州内のロスアンゼルス近辺を、あちこち観光して廻つた。息子は一週間ばかり役所から休暇を貰つて、老父母と家族を車に積んで走り廻つてくれたのである。カリフォルニア州といつても、ほぼ日本の本州ぐらいの広さがあるので、近辺の名所といつても行けばまる一日や二日はかかるてしまう。

ロスで先ず一番に感じたのは気候の良いことである。緯度からいえば日本の九州ぐらいの位置だが、この夏日本は猛烈な暑さだったのに、ロスでは少しも暑くなかつた。私には十月の秋祭り頃の気候に感じられた。それは一年中雨が降らない大陸的気候という奴で、空気が極度に乾燥しているからである。直射日光に当れば少し暑いように思うが、日陰に入ると涼しくて、私は滞在中汗をかい記憶がない。かいてもついでに蒸発してしまうのだろうが、シャツなど少しも汚れない。朝晩の涼しいことといつたら寒いくらいである。室内などは着いた晩に早速風邪を引いてしまつた。従つて真夏といつても家中には扇風機も置いていない。

アメリカは広いから、東部や北部では暑かつたり寒かつたりの所が多いようだが、西南部であるメキシコ国境のカリフォルニアは、最も気候のいい所のようである。然し雨が降らないから皆砂漠地で、水がないから人が住めない。だからロスやサンフランシスコといった所は、東部峡谷のフレーバードムから水道を引いて都市を造成している。都市以外には水がないから、周辺部の外側に田舎町というものがなく、都市の周辺はすぐ砂漠である。

空港には息子夫婦が迎えに来てくれて、到着ロビーですぐ会うことが出来た。車で息子の家まで二時間程で到着。ロス市街の東部郊外住宅地で、小高い岡の頂上近くである。孫達と久し振りの対面、男ばかりの三人兄弟だ。ロスには日本人小学校がないのでアメリカの公立小学校へ通っている。皆朗かにスクスクと育っている。

このダムとロスとは山崎と名古屋ぐらい離れている。そこから延々と水道管で水を引いているのである。この水を直接都市の水道管に流すから、日本のように蛇口さえあればどれでも飲めるとはいえない。飲用水は又別の水道管で台所へ送られてくる。旅行して一番困るのはこの飲用水だ。ジュース類は幾らでも売っているが、

我々日本人は炊飯器を持ち廻って飯を炊きお茶を飲むので、車の中にいつもポリタンクに水を詰めて運ばなければならない。ホテルの部屋で何度も飯を炊いたことか。

家の周りの芝生や植込みは、毎日スプリンクラーで散水してやらないと忽ち枯れてしまう。丁度、屋敷周辺の沈丁華が花盛りだった。日本のようにピンクでなく、皆白色なのが珍しいと思った。しかしロス市街はどこも青々としているので、これが砂漠の中の街とはとても思えない。裏庭にはプールがあつて、子供達は朝昼飛びこんで泳いでいる。スイミングスクールで習っているので、どれも正確な泳ぎをしているのが感心だ。小さいながら飛込台もあって、水深が二米もあるのに驚いた。

私も一度孫達と一緒に泳いだが、水の冷いのには震え上つてしまつた。子供達も最初は冷いのでやいやいや言つているが、浸つてしまえば元気なものだ。唇の色が紫色になるまで泳いで、上つてくるとガタガタ震えている。夜は水中照明がつき、冬は電熱で温水出来るそうだが、今は夏だからそんなことはしない。こちらではすべてが電熱で、ガスは一切使わない。

息子の案内でグランディヤニオン、デズニーランド、ハリウッド、ラスベガス、その他の観光地や名所を廻つたが、アメリカでの印象は、先ずとにかく広大であるということだ。大阪あたりの「阿呆ほど広い」という言葉通りで、しまいに退屈してしまうほど広いものだ。

広野といえば戦前の学生時代、満州で医者をしていた母方の祖父の許へ二度遊びに行つて、広大な平野は見知つてゐるのだが、それとこれとは全然違う。満州では皆よく耕作された農地で、高粱や南京豆の畠が見渡す限り続いて充実した景観だったが、こちらはまるで荒れ果てた曠野である。そしてその中を唯一の自動車道路が、地平線の向こうまで一直線に続いて消えているのだ。

道路の傍には五米四方に一本ほどの草が、それは、庭先のさつきか玉ツゲの刈り込みのよう、円形の砂漠の草が生えているだけで、あとは何も無い石ころと砂ばかりの砂漠である。しかし遠くを見ると地平線のあたりは、そんな草が重なり合つて一応緑一色に見えるのは奇妙である。こんな土地を一体どう呼ぶのか、サバンナなどというのもう少し草木や緑があつて、みずみずしい土地のような感じがするのだが、私はテレビの記録物が好きでよく見るけれど、実際に自分の目で見たことはないので、よく分からぬ。

そんな道路を時速百五十キロぐらいで飛ばして行くのだが、一時間や二時間走つ

ても家など一軒もなく、たまにガソリンスタンドのあるくらいである。そして五、六時間走らないと目的地へは着かない。それがロス近辺の観光地である。二日間かかるてグランディヤニオンへ行つて帰つた行程は、丁度青森から下関まで走つた程の距離だつた。アメリカでは車がないと生活出来ないという話がよく分かつた。向こうでは汽車や電車などの公共交通の乗物がほとんど無い。

息子の勤めているロスアンゼルスの日本総領事館は、ダウンタウンという中心街のビルの四階と五階にあり、住居からは山崎と加古川ほど離れている。その間フリーウエイと呼ばれる高速道で通勤する訳だが、片側が四車線から五車線あつて、それを皆百キロ以上のスピードで、ジグザグに抜きつ抜かれつして走る光景は、見ていてもヒヤヒヤするようである。

息子の車はニッサンの米国仕立てで三千八百cc、嫁のは同じく三千ccの車を使つていても旅行中、富士山ぐらゐの高い峰を登つたり降つたりしても、少しの高度も感じない。軽々と登つてしまふのだ。

アメリカでは平原が広いから高度差が分りにくいつが、植生の違いで見分けられた。平原は前に書いた通りだが、五百米までくると柳のような木が沢山見られるようになる。草も生えているようだ。千米以上になると松に似た木の密林になる。ただ不思議なことに日本のような雑木が全然無く、灌木類はほとんど見かけない。二、三個所で白樺らしい林を見ただけである。山の自然といつても誠に殺風景なもので、その他は秃げ山か背の高いサボテンが生えているくらいのものである。私は日本へ帰つた時、成田から甥の車で横浜へ向かう途中、日本の山々が緑一色なのを見て、本当に目を洗われるような新鮮さを覚えたものだつた。

ラスベガスでは超特大のホテルに泊つた。賭博場や劇場は各ホテルの中にある。私も一人前にバクチをやつてみた。勿論カードやルーレットなど高度なものはやれない。スロットマシンというパチンコに似たものをして遊んだ。何とかいう日本の俳優がこれで、一発何千万円かの大穴を当てたと評判になつたが、私は二十ドルの元手で一時間程遊んだらなくなつた。

デズニーランドは二時間程の所である。子供の遊び場とばかり思つてゐたのに、行ってみたら子供は余りいなくて、大人ばかりなのでびっくりした。日曜日でもないのに超満員である。全くよく遊び廻る国民だ。これはハリウッドでもグランディヤニオンでも同様である。息子はここへ浩宮様を御案内したという。息子の受け持

ちはそのような貴人要人の警護、接待といった役目もある。

息子の勤務しているロスの総領事館は、アメリカの西半分を担当し、東半分はワシントンの大使館である。ロス総領事館の外交官は総領事の下に、各省から出向した領事が五名いて、各自の管掌する仕事を分担している。例えば大蔵、通産省等から来た領事は、経済、流通情報とか、息子のように防衛庁、警察庁関係の者は警備治安情報とかいった訳で、自分の執務室と応接室があり、数人の日本人書記官と窓口にアメリカ人の女事務員がいて、普段は旅券とかビザの発行をやっているのは、日本における外国の領事館と同様である。息子は在米邦人のお世話をするのが仕事だといっている。例の三浦事件で有名になつたロス市警が、道路をへだてて向かい側にあり、息子は職務上毎日電話で連絡を取つてゐる。三浦事件についてもどうなんだと訊ねてみてやつたが、笑つて何も答えなかつた。日本から大臣や代議士などが来るのはしょっちゅうの事で、その身辺警護や世話は息子の役目である。今までの最高はイギリス留学の帰りに立ち寄られた浩宮様で、一緒に並んで撮つた写真や記念に戴いた菊の御紋章、桐箱入りの七宝製ネクタイピンなどを嬉しそうに見せていた。

最後に、日本へ帰つてから色々考えてみたのだけれど、アメリカへは別に何の期待をして行つた訳ではないが、帰つて来ると矢張りがつかりしたような感じしか残らない。息子や孫達の元気な顔さえ見ればよいと思って行つたのだから、それはそれでいい訳なのだが、自分が昔兵隊としてこの国民と戦つた経験があるだけに、そのことが心のどこかに引つかつてしまふのだと思う。

そして実際にうじやうじやと目の前にいるアメリカ人を見ると、こんな浅薄な文化しか持つていらない、軽躁な連中に負けたのかと思う反面、こんな広大な国土を持つた国と、よく戦争をする気になつたものだという、当時の軍上層部の軽浮さに対する憤り、それに、若し勝ついたら、この広い国を一体どうするつもりだつたろうといった馬鹿らしい滑稽味とが入り交つて、複雑な潜在感情となつた味気なさであろう。しかし決定的なことは、どこを見ても歴史の浅い所に原因する重量感の不足と浅薄感である。ヨーロッパでは決してこんな気持にはなるまいと思う。文化とは歴史の積み重ねの上に築かれ、歴史の浅い所に文化の重厚さは望むべくもない。人間の価値観の根元は文化にある。その匂いのしない所に私は魅力を感じることは出来ないのだ。今度アメリカへ行つて、私は益々アメリカという国が気に入らなくなつてきた。

私は、仏教遺跡とか寺院のなかというのではなく、この自然のただ中にも仏の本地仏が、仮のこの世に垂迹身の姿で現われるという思想に基づいている。その本地の中心仏が大日如来であるところから、曼荼羅と名づけられたのではなく、かろうか。

神道曼荼羅は垂迹曼荼羅といわれるよう、種々の神々の出現は仏・菩薩などの

さすがに大観光地といわれる奈良公園でも年末ともなると、団体観光客の雜踏をはなれて、その素顔を垣間みせるひとときがある。

旧暦二十九日、早朝の猿沢の池を振り出しに、興福寺の各伽藍を拝観した後は、おきまりの春日大社へのコースであるが、子供連れの氣ままな旅とて、一ノ鳥居から荒池に出、道のない疎林の中を浮見堂へ。そして飛火野の黄ばんだ芝地を横切つて春日参道へ出た。

その間、カンヴァスに向かつて絵を描く男のほか、ついぞ觀光客らしい姿はみかけなかつた。そのためか、行く先きさきで鹿の群れの多さには驚いた。

冬の陽は御蓋山を黒くかけのように浮きたせ、やわらかな起伏の黄色い芝生の波の中に巨木を点綴する風景は無国籍なゴルフ場の空虚さとは違つて、神秘的な霧氷気をただよわせているのである。

いまは飛火野、雪消の沢などとよばれる参道南の広い台地は、もと浅茅ヶ原の一部でちょうど三輪山西麓の茅原同様、「神浅茅原」の祭場であつた。手がかじかんでカメラのシャッターを切るのさえ覚束ない冷気のなかで、今朝方、興福寺国宝館でみた「春日曼荼羅」のさまざまな情景が思いうかんで、ここにまばらな巨樹たちが、神集いの依代であつたことが納得されるのである。

春日鹿曼荼羅の妖しいまでの美しさ。雲に乗る白鹿の背に神、その上にある大きな神鏡は鹿島から影向の不空羂索觀音（春日本本地仏）の姿である。背景には、御蓋山、疎林、社殿などリアルな細密画があつて、主題の異様さをひときわ際立たせているのである。

阿修羅のこと

山崎文学会

安井道夫

痕跡があるという自觉は、はじめての経験であり驚きであった。

そういえば、国宝館展示の各尊が今日ほど抵抗なく素直に私のところを満たしたのも、奈良の素顔をみる思いのうまい季節に行き会つたためかも知れない。國宝館内部には、興福寺の繁栄の歴史そのまま、白鳳から鎌倉にかけての名品中の名品が展示されている。

卑近な例では、志賀直哉が禪のたるみ具合にひどく感心したという竜灯鬼。

二角三眼、左手で燈籠を肩の上までかつきあげているが、相当の重量とみえ、力一ツと氣合いを入れた瞬間の動的な天灯鬼と対になっている。

竜灯鬼は首に竜を巻きつけ、頭上に燈籠、口を閉じじつと重さに堪える姿ながら、両眼の見開き具合といい、さきほどの禪の件にしてからが、全身からおかしみが噴出しているのである。

この類例のない鎌倉復興期の傑作は、運慶第三子にあたる康弁の作だという。

また数奇の運命に身をまかせ、焼け残った頭部さえ痛ましい傷をもちらながら、なおひとを引きつけて離さない高貴さを持つ不死身の美しい銅造仏頭がある。

これは大化の改新で功のあつた蘇我倉山田石川麻呂の冥福を祈つて造仏（六八五年）された旧飛鳥山田寺の丈六薬師如来像で、一九三七年興福寺東金堂の解体修理中、本尊台座下から発見され、大変な話題をよんだものである。

そのほか、十大弟子立像、法相六祖坐像、無著・世親菩薩立像など六十体ばかりの仏像の林に、無私のこころで迷い込めたらしいものである。

私もひとなみに三面六臂の阿修羅像のまえで足をとめた。確かに有名すぎるほど人気のある尊像であることは知っていたが、実物と対面するのは初めてである。

まず正面の顔を見る。やや憂いを含んだ清純さがただよつていて、少女だろうかと思う。ところが、こちらの体が動いて視点がずれると、今度は厳しさが表面にてて少年の一途さを思つてしまふ。

確かに胸の前で合わせた二手の厳しさと、かすかに眉を寄せたほか、一点のたるみもない端正な顔だちである。

前方を見る目は、私の歩みに連れて執拗に私の思いを追跡してくる。何か特定の性格を、こちらの勝手で思い描いたとき、必ずしつべい返しを受ける強い否定のまなざしになる。

どんどんと大きくなる魔力を持ちながら、逆にどこまでもやさしく静寂に向

かう明晰さがあつて、密教仏特有のねばっこい繁雜さは感じられない。腕は六臂とも筋肉をそぎ落とした姿の鉄管のような細さで、その一手一手はたよ

りないほどの纖細さをもちながら、六臂の交響は豪快といつてもいいほどの仕方で空間を領有しているように見える。

左右の二手は掌を上にむけ、ちょうど天空を支える様子に舞つている。

側面を見ようと真横へ移動すると、左右の二手の腕が表情を隠す恰好になる。斜め後方からみる左側面は、唇をかみしめ、いまにも泣き出さんばかりの少年か。いや、ここでも表情はつぎつぎに変化する。堪えに堪えた顔だけに眼光は一層鋭く、正面よりもなお直接的に射すくめられてしまう。

この眼光の中にこそ、インドラにより貶められた悪神としてのアスラの面影が残つているのかも知れない。

この像は天平六年（七三四）の作といわれ、脱活乾漆の厄介な技法によつているが、同じ館内にある鎌倉期の国宝・金剛力士像の桧材を用いた押しつけがましい名人芸などに比べ、私にはよほど好ましいものに思われる。一九五一年、「乾漆八部衆立像八軀」として阿修羅、五部淨、沙竭羅、迦樓羅、鳩槃茶、乾闥婆、緊那羅、畢婆迦羅の天部・八部衆が一括国宝に指定された。

うち阿修羅像のみインド的色彩を濃く残して、条帛と腰裳の半裸に近い姿をとるが、他の装束はすべて中國風の神将形に改変されている。

明王の前身がヒンドゥー教の神々とすれば、天部の諸尊はパラモン教や外道の神がみを取り入れたもので、八部衆のほかにも帝釈天、韋馱天、四天王、鬼子母神、焰摩天、荼吉尼天、七福神、聖天など興味ある神々が限りない。また天部は、仏教諸尊のうちもつとも衆生に近い存在であり、その都度現世利益の神々になるのである。

いま曼荼羅の歩みを思い返すとき、もと中尊の釈迦の四方に四仏を配していたものが、密教の発達とともに法身仏・大日如来を生み、應身仏としての釈迦は現実世界の仏として東方に位置をかえ、天部の神々と同居するようになる。

我が國で曼荼羅といえば、胎藏曼荼羅と金剛界曼荼羅を一対とした金胎両部の現ちは中国にはじまるといわれる。

西チベット・ラダック地方でもつとも古いアルチ寺三層堂（十一世紀建立）の壁、

画では、すでに「大日經」系の胎藏曼荼羅はなく、「金剛頂經」系の金剛界曼荼羅の変種ばかりになっている。

結局、日本に輸入されたのは、インド密教中期までで、「金剛頂經」系の展開した後期密教とはほとんど無縁であった。

さて、胎藏曼荼羅まで逆もどりして阿修羅の姿を搜せば、最外院南門傍らに小さく描かれているのを見つけるだろう。このように仏・菩薩からあらゆる神々を貪慾なまでに包摶し尽した胎藏曼荼羅のうち、もつとも目立たない存在としての阿修羅とは一体何者なのだろうか。

仏典では八部衆の他の面々同様、人間に敵対する強い魔力の持ち主である鬼神として恐怖の対象であつたものが、一朝、釈迦の説法に感動し、それからは仲間に逆らつてまでも護法の役割を果たしたと伝えられている。

古代インドの「リグ・ヴェーダ」の初期までさかのばれば、アスラが善神であり最高の捷の保護者であつたことは間違いないが、インドラと対抗して悪神にされ、ついには悪鬼になり悪鬼の代表格までに祭り上げられたとき、一体そこにどんな力が働いたのかと私はいぶかるのである。

紀元四千年紀から三千年紀にかけてインド・イラン語族と称される人たちが、ヴォルガ川の東、南ロシアのステップ地帯で半遊牧の生活を送っていたとき、のちに「リグ・ヴェーダ」讃歌やゾロアスター教の「アヴェスター」聖典に受けつがれてゆく神々の名前をすでに知っていた。その中には、ヴァルナ、ミトラ、インドラなどインドの主要神となる神々も混じており、最高神アフラ・マズダより主を意味する「アフラ」の称号を付されていたのである。

ちょうど紀元前一五〇〇年を中心として、分離したうちのインド・アーリヤンがアフガニスタンからヒンズークシ山脈を越えて波状的にインドに侵入、最初にパンジャーブ地方に定着することになる。

その後、インド全域が異なった度合でアーリヤ化してゆくのであるが、アーリヤンの言語や祭式、信仰形態、社会制度などがトラヴィディアといわれる原住民の中へ徐々に浸透していく過程が神話に反映し、史書をもたないインドでは、それら伝承された宗教文献だけが歴史解明の手掛かりになるのである。

「アヴェスター」の最高神アフラ・マズダの「アフラ」が「ヴェーダ」のアスラに対

応することは確実で、古里イランにおけるインドラの運命は、倫理的なアフラに敵対する邪悪な闘争好きの種族としてデーヴア（悪魔）族とみなされるようになるのである。

これはアスラ神群（ヴァルナ、ミトラなど）とデーヴア神群（インドラ、ナサツティアなど）との激しい争いの結果であつて、同じ神族同志の対立でも条件の違つたインドにおいては、アーリヤンの宗教と非アーリヤンの宗教との対立として民族紛争の透視図とみることもできる。

イランに残留した部族は、農耕、牧畜に精を出し、一層文明化して行つたであろうが、もう一方はハラッパー、モヘンジヨーダ等高度な文明都市まで破壊しておきながら、都市を造ることも交易、通商を組織化することも知らず、戦いにつぐ戦いで掠奪に明け暮れた遊牧の民であった。両者の神に対する関係も異なつてくるのが当然である。

インドラが神酒ソーマを飲み、自ら戦争を引き起こし、武勇と名声のほか何も欲しない英雄神で、粗野なアーリヤン戦士の面影を持つてゐるというのなら、イランではとは反対に、その人気ゆえに「リグ・ヴェーダ」讃歌の四分の一を占める最高神になつたとしても何ら不思議はないのである。

そういう時代に、自然の秩序から人間の捷や契約まで司どる倫理的意味合いの強いアスラの神々が、たとえどれほどの神通力を持つていても、インドラには対抗できず、もともと部族的にも少數派でしかなかつたものが、敗者である原住民たちの神々と融合していったと考えることも可能ではなかろうか。

ところが没落したのはアスラだけではなかつた。アーリヤンのすべてが定住し、トラヴィディアとの混血が進み、いまや征服すべき何ものもなくなつたとき、最高神インドラは姪欲ばかりの強い滑稽な神となり、その面目も地位も一緒に、プラフマン、ヴィシヌ、シヴァの三体の神に奪われてしまう。

そのうえ、帝釈天として仏教に取り入れると今度は東方の守護尊となり、胎藏曼荼羅の最外院では天部の一員として阿修羅とも共存するようになるのである。もう一つ付け加えると、デーヴア族の長がインドラであったように、アスラ族の首領はヴィローチャナ（阿修羅王）で、やはり胎藏曼荼羅では阿修羅と並んで配置されているが、そのヴィローチャナの子がヴァイローチャナであるという説がある。

ヴァイローチャナとは、東大寺大仏の毘盧遮那仏であり、「大日經」教主、胎藏曼荼羅中台八葉院の中尊・大日如来の前身だということになつてしまふ。

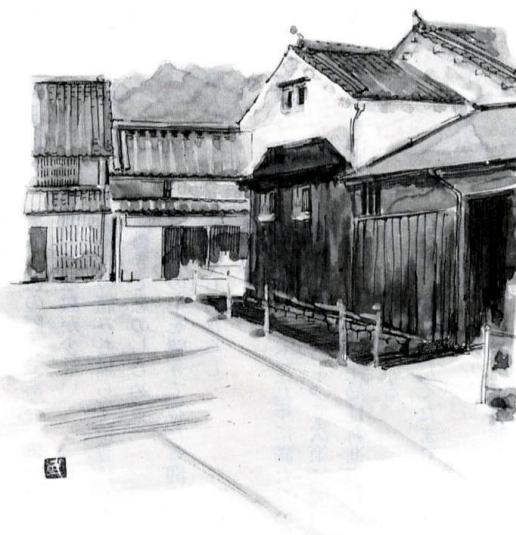
こんなところにも、マンダラの大きな秘密が潜んでいて、現代には決して解けないパズルであるといわれる意味の一端が覗えるのかも知れない。

国宝館の仏像たちの林の中で、今日私の思ったことといえば、人間の時間の二千年や三千年では何一つ変わらないという感概である。本質において変わらないとうだけではなく、変化に対して大変な危惧を持ち続けているのではないかと思う。

神々や環境などはどんどん変化させてまでも、己の習性だけは断固として変化させたくないという奢りがある。

阿修羅の怒りもそんなところから発したのかも知れない。

そうして、そんな人間に己を造られたという、何とも静めようのない憤懣が内にこもつた怒りではなかろうか。



短歌

新樹短歌会の人々（一）

山崎歌話会 藤村省三

新樹短歌会は、国民文学・短歌春秋の何か、又は双方に所属していて私が指導している人達のグループである。歌歴は三十年を超える者から一年に満たない者まで様々であるが、毎月第三日曜日に町立いきがい創造センターに集まって、熱心に作歌の勉強に励んでいる。その中の何人かを紹介しよう。

○在賀彦

古参の一人で、国民文学・短歌春秋の同人である。県の短歌大会では36年秋に第二席となり、44年秋には第一席となつて知事賞を受けた。57年に出版した歌集「石工の歌」には、家業の石工を誇りをもつて詠いあげた作品が多く、ユニークな歌集として高く評価された。

二十年石を切り来て槌握る形に曲りし

指に箸持つ

今日切りし石の堅さの残る手にこぼれ
シビールの泡が消えゆく

○日下ふさゑ

短歌春秋同人である。農婦として、冬

季郵便配達婦として、労働を詠んだ作品にすぐれたものを残している。また50年の宮中新年歌会始の詠進歌は佳作に選ばれている。

稲刈の地下足袋のまま額づきめ祭終りて灯の残る宮
弁当に持つゆで卵郵便婦わがポケットにしばらく温し

○栗山節子

山崎高女在学中に「くさのみ短歌会」に加入して作歌を始めた。瑞々しい感受性と繊細な感覚が認められて、早くから国民文学同人となつた。

産みし仔を皆捕られたる野良犬が檻にかかりて一夜を啼けり
諦めて檻に鎮もる野良犬の潤みたる目に野性失ふ

○山本千代

短歌春秋同人である。作歌の当初は熱心で、48年秋と51年秋の県民短歌大会には、ともに第一席で知事賞を受賞したがその後、地区の婦人会長に選ばれてからは怠りがちになつていた。新樹短歌会結

成以来事務局を担当している。

なほ続く競りのざわめき後にして曳かる牛が声ながく啼く

少しづつ歩行練習する夫に手の届く距離もちて從ふ

○北 隆治
短歌春秋同人である。ベンキ職人としての職業詠に個性的な特色がある。

真日熱く焼けしトタンを塗りながら明日の仕事の無き事思ふ
とち込めらるる思ひはあらず降る雪に救はれしごと仕事を休む

○富和かず子
短歌春秋の同人である。女らしい柔かな抒情に特色がある。

母を偲ぶよすがとなりし虫眼鏡たどりたどりて新聞を読む

色淡き一握の菜を茄であげて人待つ冬の宵あたたかし

○野中勝子

国民文学の同人である。作品は女性に珍しく理知的で硬質である。最近、脳血栓を患い再起を心配されたが、持ち前の精神力によって苦難に耐え、リハビリに努めて、ひと月の欠詠もなく出詠をつづけている。

仏縁をもちてけふ見る沙羅の木の眞白の花をめぐる光輪

慣れそめの些細は知らず子の嫁となる娘にわれの心を開く

○鷺元善子

短歌春秋の同人である。歴史は古いが病弱で作歌数が少ない。

手術後の痛みも識らず自覚めしか二夜を過ぎて窓のしらめる

○森本萬千子
無意識の中を喘ぎてゐたる間の口の渴きは今もあたらし

作歌を始めて未だ五年に満たないが、その素質と努力によつて次第に頭角をあらわし、感覚的な作品は新進氣鋭として注目されはじめている。

わが裡に疲れ重たくたまりゆく朝夕の山鳩の声

○安東はつ子
山峠に積まれし廻車風葬を思はせて風に光る窓あり

森本萬千子と時を同じくして我々の仲間に加わつた。若々しい感覚をもつた作品に魅力があるが作歌数が少ない。

たわいなく見えつつ宙に張る糸のしたかにして蜘蛛のいとなみ

人の居ぬ無人市場に人の目を意識しながら並ぶ品選る

○伊藤まさ子
短歌春秋に加入してまだ三年余りだが最近俄かに意欲的に作歌をするようになつて目覚ましい歩進を見せていく。中で

も家業の牛飼いの歌には独特の味わいをもつものが多い。

吹くままに揺れる桔梗風止めば静かに確かな位置保つ

これだけは言はねばと言ふ裡の声殺して弾く花の種子採る

○大谷吉次
国民文学にあつて将来を嘱められる。嫁の言ふままに幼の守りをするひたすら母に仕へ来し妻

子夫婦の居ぬ安けさにひたりしが二日目われと妻と侘しむ

○安東はつ子
いつの日も音量高くラジオかけ姫は内職の釣針つつむ

○神戸新聞社賞
「右ちくさ」「左さくしゅう」古びたる道標の声を聴く如く立つ名賀ときわ

○千種町長賞
明けきらね牛舎に來り灯点せば仔牛ら

すでに起きて餌を待つ 伊東まさ子

○千種町教育委員会賞
吾がエプロン着けたる案山子のかたは

らに鶴下りきて豆を啄む 森谷としゑ

○千種町文化協会賞
卵抱く雲雀なりしか草刈機近づくまで

は飛び立たざりき 安政 嘉子

○千種町農業協同組合賞
する眦上げて 田中 君枝

○千種町ライオンズクラブ賞
白き服着たる童が遊園地の緑を蝶の如くによぎる 野中 勝子

○千種町商工会賞
鍋磨クリズムに何を感じむ突然近く雨蛙鳴く 中田 博子

●知事賞

降りしきる中を勤めに出でてゆく妻に負ひ目をもちて籠れり 北 隆治

●県会議長賞
風船の割るる音せしバスの中ひととき置きて児の泣く声す 森本萬千子

●知事賞
吹くままに揺れる桔梗風止めば静かに確かな位置保つ

これだけは言はねばと言ふ裡の声殺して弾く花の種子採る

●県会議員賞
いつの日も音量高くラジオかけ姫は内職の釣針つつむ

●神戸新聞社賞
「右ちくさ」「左さくしゅう」古びたる道標の声を聴く如く立つ名賀ときわ

●千種町長賞
明けきらね牛舎に來り灯点せば仔牛ら

すでに起きて餌を待つ 伊東まさ子

●千種町教育委員会賞
吾がエプロン着けたる案山子のかたは

らに鶴下りきて豆を啄む 森谷としゑ

●千種町文化協会賞
卵抱く雲雀なりしか草刈機近づくまで

は飛び立たざりき 安政 嘉子

●千種町農業協同組合賞
する眦上げて 田中 君枝

●千種町ライオンズクラブ賞
白き服着たる童が遊園地の緑を蝶の如くによぎる 野中 勝子

●千種町商工会賞
鍋磨クリズムに何を感じむ突然近く雨蛙鳴く 中田 博子

● 宍粟郡歌人連盟賞

そのままに本日休診の札かかり引原診療所荒廃すすむ 渡辺ちよの

◇ 西播磨県民短歌祭

(10月17日・西播磨文化会館)

● 兵庫県文化協会賞

病みつぎて二人寡黙にゐる居間に咲く
君子蘭華やかすぎる 灑元 善子

● 西播磨県民局長賞

門先に鬼百合朱く咲きつきて休診の札
けふもかかれり 富和かず子

● 西播磨文化会館長賞

川淀を二十米泳ぎ來し少女平たき胸をして立つ 森本萬千子

● 奨励賞

夕せまる厨に網の茄子焼けて湯気噴く
音すその小さき音 青柳 良

◇ 兵庫県民短歌大会

(11月23日・加古川総合文化センター)

● 兵庫県文化協会賞第一席

亡き夫の地下足袋はきて打つ畑に在り
し日と同じ足跡がつく 日下ふさゑ

● 兵庫県文化協会賞第二席

庫裡うらの大豆畑の中に立つ案山子は
僧の夏衣きる 伊東まさ子

● 入選

除草剤撒きゆく田の面夕昏れていつま
でも温し足に踏む泥 森本萬千子

嬰兒の覚めておのづと触れし手に起上
小法師まろき音たつ 栗山 節子

山崎歌話会詠草抄

天井の節目に沁みし咳払ひ逝きてふた
月をりをり聞こゆ 大井 秀子

石据ゑす林泉しつらへず住み旧りて庭
を寥しと思ふこともなし 稲村 幸子

明珍のかすかの響幻聴となりて不眠の
耳底に鳴る 松本 富治

裸体にて立つマヌカンのかたち良き腹

部は脇のくぼみをもたず 松本寿賀子

宅急便届けてくれし青年が山茶花の雪

ふふみ清しむ 北川 智恵

部屋の調度映して光る夜のガラスほの
かに庭の紫陽花の透ぐ 藤村ふくよ

さきゆきを思ひて夜半をさめをればナ
ースコードの闇に響ける 菊原たか子

極楽の餘り風とぞ母そはの言ひぬし風

かわが吹かれゐる 藤原 すみ

楓の葉に降る雨さむき昨日今日葬りの
後を如何にいまさむ 山崎キヨ子

早起きの夫の出で来ぬ襖戸を静かに引
き声をかけたり 青柳 良

單純とも整理ベタとも指摘する子に逆
らはず涙こらぶる 太田たき子

杖もたず初めて三歩あるけたり確かに
吾は三歩あるきぬ 赤松 年重

減反面積三アール違反するゆゑに刈り
倒す稻の花は匂へり 新田 弘美

書に次の様に説いています。即ち「茶の
湯の極致は仏法の修養にある。家居の結

端一 心 の 和 夫

御茶 茶華道協会 山崎

近頃、御茶が盛んで御茶をたしなむ人
びとがふえ、御茶が社会に進出するよう
になりましたことは、誠に喜ばしいこと
であります。御茶が盛んになればなる
程、枝葉末節にとらわれ、本の精神を忘
れがちになりますが、自戒せねばならぬ
ところであります。御茶の世界では御茶
と言わず、茶道と言うのは茶の湯を通し
て精神を鍛え、道義を昂揚するもので、
御点前は一つの手段で最後の目的ではあ
りません。利休居士は「茶の湯とはただ
見は勿論のこと、心もきれいでなければ
ならぬと強調しています。寂とは物静か
で心の煩の去った無念無想の境地を指し
ているかと思はれます。

茶人小堀遠州は茶の心を次の様に説いて
います。「春は霞、夏は青葉がくれの郭
公、秋はいとど淋しさまるる夕べの空、
冬は雪の曉何れも茶の湯の風情ぞかし」
何れに致しましても私達は御茶を通して
御茶の本を知ることに努めたいものです。

第五回山崎町俳句大会

山崎俳句協会	原	田	小次郎
山崎俳句協会賞	山崎 芦田 八重	入選	山崎俳句協会賞 栗拾ふ今日落ちし色古き色
くさぐさの木の実干しあり薬草園	九年母 中野 博子	九	山崎 田中 八重
松摺の一と日孫等も松の中	一宮 宮馬 幸子	一	山崎 田中 八重
木の実降る音も聴き分け病み給う	一宮 杉本 和水	一	山崎 田中 八重
拾ふ子も駆け抜ける子も木の実雨	一宮 宮馬 幸子	一	山崎 田中 八重
木の実降る独り外れの泣き羅漢	山崎 原田小次郎	一	山崎 田中 八重
パンジーの五色の花壇花の文字	山崎 秋久 光子	一	山崎 田中 八重
風光る花園祝文字の花時計	山崎 東軒 千代	一	山崎 田中 八重
木の実独楽作る耆老の童顔に	山崎 山田 東軒	一	山崎 田中 八重
水仙の白にたたずみ、チューリップの異	山崎 藤家 千代	一	山崎 田中 八重
場末なる夜寒の屋台独り酌む	山崎 福田 泊水	一	山崎 田中 八重
寝しづまる聚落跨ぎ銀河濃し	安富 田中 恵	一	山崎 田中 八重
蠟燭の燈を継ぎ通夜の影夜寒	自販機の灯のみ明るく街夜寒	一	山崎 田中 八重
芽柳の揺れて水車の水しぶく	水車も廻っていた。そして芽柳が垂れて	一	山崎 田中 八重
春の日や饑舌もなし羅漢群	いた。	一	山崎 田中 八重
春うららか石仏はみなねむり居て	春めいた赤に立止りして、句作してゆく。	一	山崎 田中 八重
五百羅漢楠の大樹に守られて	手を合わす羅漢の顔に蟻ひとつ	一	山崎 田中 八重
春陽の静寂を守る石仏	春陽の静寂を守る石仏	一	山崎 田中 八重
春うららか石仏はみなねむり居て	春雄	一	山崎 田中 八重
五百羅漢楠の大樹に守られて	五百羅漢楠の大樹に守られて	一	山崎 田中 八重
春の日や饑舌もなし羅漢群	春の日や饑舌もなし羅漢群	一	山崎 田中 八重
春愁や寄り添ふ羅漢何話す	春愁や寄り添ふ羅漢何話す	一	山崎 田中 八重
永遠に謎の石仏、そして深い憂愁を秘め	永遠に謎の石仏、そして深い憂愁を秘め	一	山崎 田中 八重
春惜しむかに石仏は目瞑れる	春惜しむかに石仏は目瞑れる	一	山崎 田中 八重
その時、その時によつて表情の違うかに	その時、その時によつて表情の違うかに	一	山崎 田中 八重

フラワーセンター五百羅漢吟行

昭和六十一年四月六日

山崎俳句協会・青嶺句会

芦田八重

解く帯の翳が渦巻く十三夜
山脈 小紫 いく
私は終始、山中つね女さんと一緒にだつた。
日の永き老の歩巾に園巡る 八重
昼食をして、五百羅漢へ着いたのは十三
時過ぎだつただろうか。
千吉の黙を秘めて、石仏は何を私達に語
りかけているのだろうか。

触れてみし像淺春のぬくみあり 東軒
春陰の胸に手を組む仏達 小次郎
春光は洽く羅漢像慈顔 泊水

加西のフラワーセンターへ着いたのは
十時頃だつただろうか、入口で先生の簡

単な挨拶があり、総員二十名がおもいお
もいのところに散つてゆく。
とか。

入ったところにパンジーが咲いて、パ
ンジーの花時計が時を刻んでいた。

花時計秒針廻るすみれ中 八重

何にもかも忘れうららの花園巡る千代
吟行の殿に躍き春惜しむ 疎人
吟行の殿に躍き春惜しむ 疎人
私は終始、山中つね女さんと一緒にだつた。
日の永き老の歩巾に園巡る 八重
昼食をして、五百羅漢へ着いたのは十三
時過ぎだつただろうか。
千吉の黙を秘めて、石仏は何を私達に語
りかけているのだろうか。

触れてみし像淺春のぬくみあり 東軒
春陰の胸に手を組む仏達 小次郎
春光は洽く羅漢像慈顔 泊水

加西のフラワーセンターへ着いたのは
十時頃だつただろうか、入口で先生の簡

単な挨拶があり、総員二十名がおもいお
もいのところに散つてゆく。
とか。

入ったところにパンジーが咲いて、パ
ンジーの花時計が時を刻んでいた。

花時計秒針廻るすみれ中 八重

見ゆる石仏、肩を寄せ合つて立並ぶ石
仏に別れをつけ、柳田国男記念館に向
かう。

春浅き常福院を訪ねて

山崎俳句協会・山脈句会

小畑ぬい

四月九日、南光町船越常福院に吟行いたしました。折悪しく朝からの雨でしたが、然し雨降れば雨を詠み、風吹けば風を詠む俳句の徒、めぐまれた環境に居る私達十三名は、自動車・タクシー・バスなど、思いついに分乗し、途中、農家のたづまい、新芽にもえる山々に句心を培いつつ、十時過ぎ楽しみに待ちに待った常福院に到着いたしました。

坊までの著莪の溪水潺々と

疎人

道標も雨に寂びいてあせび咲く 静山

常福院は小紫様のお住い、準備万端整えて温かくお迎えいただき、少憩の後、本堂へと案内いただきました。

百合活けて方丈一机置けるのみ 隅子

長閉なり寺の掃除のゆきわたり 雪子

本堂は木の香も新しい広く堂内、阿弥陀佛の慈顔、自ら心の安らぐ思い、縁に延れば周囲が一望のもと、すばらしい眺めであります。

春灯映え慈顔に在す阿弥陀佛

疎人 いく

花冷に喜捨の箱据え弥陀在す

本堂のお参りを済ませた頃には雨も止

み、早速外の写生に移りました。外は椿

世に在らぬ人の画展や春寒し 八重
それぞれの思いを育てながら、日永の吟
行を惜しみつつ帰路についた。

が咲き、芽木の枝には小鳥がさかんに囀り水子地藏は春雨に濡れ一入哀を感じました。近くを流れる溪のせせらぎ、著莪の群生もあり、特に宝珠が曇り空に輝き句材豊富に、一同〆切りの十二時までを心行くまで句作にとりくみました。

内陣の法燈赫く木の芽雨

疎人

堂塔の宝珠金色花暈

疎人

鯉の絆の乱れもつるる春の水

しづ

溪水の岩根伝いに花山葵

榮女

総身に春の鼓動を聞く秘佛

いく

せゝらぎに鵠鵠和して峪静か

薰風

一鳥の鳴きて増し来る芽木の上

柏人

轡りは苔むす墓の菩提経

恵

轡りの聞える縁や沙羅つばむ

源子

花椿地藏の涎布濡れそぼち

しづ

花冷や水子地藏の遊具あわれ

すゞ子

子を抱ける水子地藏に椿散る

紫霞

野の佛木の芽おこしの雨にぬれ

静山

燈灯し曼陀羅拌す花の冷え

いく

修業大師佇み在す芽石菖

しづ

(生涯教育かしわの学園)

例会

昭和21年創立以来現在まで続いている伝統俳句の研修と親睦の句会

▼

山脈句会

事務局

旭町

福田泊水方

例会

日

第二水曜日

第四水曜日

指導・講師

和田

疎人

事務局

東鹿沢

小畑ぬい方

第三火曜日

指導・講師

和田

疎人

春霖に櫻門古りて佇まふ

光子

清流の音春雨にまぎれなく 素栄

老子も芽ぶり宝珠のきらめきてすゞ子

峠の春いまだ浅しや山椿

柏人

お淨土へいざなう鐘か木の芽搖る静山

会場は庫裡の一室を借り、出句、清記選句と進み、和田先生の名披講及び選評をいただき、午後三時、それぞれ家路に就きました。

疎人先生の微に入り細に入った御指導はもとより、小紫様の真心からなる御接待、句友の皆様のご友情、本当に充実しました。

待、一日であります。

三月はNTT局長で、新しい情報化について、身近かな情報化が急テンポで進められている。キヤブテンシステムが東京で実施され、神戸・姫路と予定されています。

その後、郡内の治安、健康例会、史蹟めぐり、老齢化に伴う病の予防、ファミリー例会、食生活の改善等を消化して参りました。

ただ、十月は有名芸能人を招んで芸能文化について懇談を予定しておりました

が、時間がとれず残念ながら中止となりました。

本年最後は、ふる里が生んだプロ野球選手を迎へ、一夜を楽しく過ごすことにしております。

こうした例会をとらえ親睦を図り、共に学び、郷土文化を親しみながら地道に歩みたいと考えております。

楽しい対話のある会

昭和会 平松幹司

一月の総会に始まって毎月の行事が進行されてゆく。一月は弁護士にお願いして、最近の事件・状況を聞く。ささいな事でも裁判になる。説明が終わればいろいろ質問ができる。話より質問の時間が長いのが昭和会の特長もある。

三月はNTT局長で、新しい情報化について、身近かな情報化が急テンポで進められている。キヤブテンシステムが東京で実施され、神戸・姫路と予定されています。

その後、郡内の治安、健康例会、史蹟めぐり、老齢化に伴う病の予防、ファミリー例会、食生活の改善等を消化して参りました。

ただ、十月は有名芸能人を招んで芸能文化について懇談を予定しておりました

が、時間がとれず残念ながら中止となりました。

本年最後は、ふる里が生んだプロ野球選手を迎へ、一夜を楽しく過ごすことにおります。

こうした例会をとらえ親睦を図り、共に学び、郷土文化を親しみながら地道に歩みたいと考えております。

郷土研究会近況

山崎郷土研究会 安井清介

山崎郷土研究会も山崎町文化連盟に加盟している団体です。会員数は現在約七百名に達しております。皆様の深いご理解とご支持により会員数は年々増加してまいりました。会員の方々が最も期待を寄せられていることは、春と秋年二回の研修旅行です。私の手元の記録では約三十年間続いております。郷土研究会が年二回発行いたしております郷土会報は昭和三十三年に最初宍粟郷土会報として発行されておりましたが、昭和四十七年第四十号から山崎郷土会報と名称が変更に



ただきましたが、私達の郷土もまた日本の歴史の中に生きて今日があるのであります。

惹くものがあるのでしょう。

山崎町文化連盟にご加盟の各種団体の

奈良京都をはじめ全国には有名な古社寺が沢山あります。シルクロードの終着点である奈良で近くシルクロード博が開か

なりました。昭和六十二年は会報発行十五周年に当り、また第七十号発行の区切りの年にもなりますので、研修旅行は日帰り旅行ばかりでしたが、これを記念して一泊旅行を計画するよう関係者で話しあっております。

私は機会をみて全国各地の古社寺を訪れるにいたしております。古社寺を

訪れる人は必ずしも年輩者ばかりではありません。どこの社寺を訪れても若い人

達も沢山参拝しています。そこには言葉

には表わされない心の安らぎを見るか

らでしょう。古寺の佛像の前に額突き縁

側に腰をおろして静かに庭園を眺める氣

持は日本人のみならず外国の観光客の心

を持たせています。

郷土研究会の今後の課題として一つは

若い層の方々の入会により活性化を計りたいこと、二つは兵庫県下にも多くの郷

土史の研究団体がありますので他団体との相互研究、交流をはかること等、山崎

文化向上に微力を尽くしたいと思います。

以上、山崎町文化連盟に加盟の各団体

の方々のご理解とご支援とお願い申し上

げます。

また、現在に生きる人と相通するもの

があるばかりでなく、詩中より学ぶもの

がいかに多いかを美感させられるのであ

る。一篇の詩、一首の歌の中には、作者

の生涯に体験した感動の精華が結ばれて

います。

その詩を吟じ伝えながら、感動し生き

甲斐を感じている者の一員である。

日本の伝統芸術の一つである詩吟は、

漢詩を吟じるわけで、作詩法その他の約

束事に則つて吟じなければなりません。

連盟傘下の各流派においては、一人で

多く的一般愛好家を歓迎すると共に、

詩の心に従つて、人間性を豊かにし、教

養を高め、人格の完成を目指していると

ころである。

中国の唐の時代といえば李白、杜甫らの活躍した八世紀半ばのころで、これを中点とする前後三百年の時代が匂うがごとき詩の花盛りの時期と言えましょう。日本への影響は、その後、宋、元、明、清と続きますが、各王朝の持つ時代背景の異なるにつれ、移り変わりはありますが、本質的な点に變化はなく、わが国江戸期

の安井白石や荻生徂徠ら漢学好みの学者らや五山の僧らによつて、あるいは唐詩が、または宋詩が世に普及され、延いては幕末非常時の悲憤慷慨の志士らを鼓舞させ、時に藤田東湖の正氣を和する詩作となり、声に熱し気に舞い、秋水由に躍つて憂国の意氣伸張に、大いに資するところがあつたのである。

私たち吟詠爱好者は、そうした時代に完成された漢詩を読み、また吟じると、当時の人情の機微に接することができる

その際、いかに吟じたら、作者の心が表現できるか、これがもつとも肝要な課題といえましょう。

ところで、詩吟は基本の修得さえできれば誰にでも吟じられるのです。大きな声を出すことは、腹式呼吸の効果と声帶を刺激し血液の循環をよくするので健康で、身体の老化を防ぐとも言われております。

連盟傘下の各流派においては、一人で多くの一般愛好家を歓迎すると共に、詩の心に従つて、人間性を豊かにし、教養を高め、人格の完成を目指しているところである。

力ヤ葺きの屋根

植物同好会
井口 武一

第十回観察会。安富町の加茂神社々叢はうつそうと繁って、参道の杉や松は古い。した草のアザイも、もう葉は朽ちて空の実を風に晒しているのもさみしい。陽の射しこむ辺りにススキの穂が逆光に光る。

おりとりてはらりとおもきすすきかな（蛇笏）

ススキはカヤとも呼ばれ、どこでも見られる野草であるが、かつては森林を焼いて切り開いた「茅場」から採られた。カヤは尾根葺きになくてはならないものであった。そしてカヤ葺きの屋根は、断熱性が強いので、冬は暖かく夏は涼しい。昔、畠裏で火をたくのは濡れたカヤの屋根をかわかしたり、煙でカヤの中に入む虫をいぶし殺すことにつながり、屋根の耐久性を増す生活の知恵であつた。

秋の暮、ススキ野原に行くと、このカヤが束ねられ、根方を下にして干された。田の稻は株を上にしてはぜ（稻木）に掛けるのは逆である。

これは、ススキの葉が雨や露を受けると、ちょうど樋の役目をして水を葉先から葉柄（葉と茎のつけね）へと導く作用をする。葉柄には微毛があつて茎の中へ入れず、根本の方へと導いていく。

したがつてカヤで屋根を葺く場合は、根の方を下にして外側に出すのである。もし株を上にすれば雨水は葉端を伝わつて屋根の内側によぼう、つまり雨もりがするのである。

こんな話を内海先生（県立昆虫館長）から聞きながら、植物同好会の面々は歩く。

カヤ葺きの屋根が見られなくなつて久しい。屋根葺きの「やねやさん」と呼ばれる職人さんも、もういない。やねやさんは、いつも黒い顔をして、自分量で、寸法やカヤの量などをきっちり見積る。よせむね、きりづまなど名人芸を見せてくれたものである。

少年の頃、家のツシに上ると毎年刈り採られたススキが山積みされ、いい匂いが漂つていたのを想い出す。

屋根の葺きかえは親類や近隣の人も手伝いに集まつた。五十年ももつというのはざらであった。

ついでながら中国山地に広く分布する（同好会は月一回、土曜日の午後、観察会をもつてます。だれでも参加できます。

化中閣を持つ山宗枝山茶道研修会

思慮分別にこだわらずあたり前の事をあたり前にやることである。世間では『面倒臭い』『むずかしい』の反対の意味で『造作ない』という言葉を使うが『無造作』ということは実は容易なことではないのである。文字の本来の意味で『無造作』は自然法則に行うこと。これがここに『無造作』の意味である。但し『無造作』といつても、修養せず、場あたりの勝手元の一話集の一頁を思い出した。忙しいという字は、心を亡うと書く。これを縦に重ねると『忘れる』という字になるとおつしやつて。そのとおりいつも心を亡くしている自分を省みて慚愧の思いにかられた。もう数年前、御縁あつて京都のある方から頂戴した三井寺管長大僧正俊謙の落款になる『無事』の茶掛を床にかけやつと落ちつき、自分にかけた。改めてこの軸の二字を見つめてみると不勉強者の自問自答では納得出来得ず禅語の本を開いてみることにした。

『無事』とは『無事是貴人』の事でこれは臨濟宗の宗祖臨濟義玄の臨濟録に『無事是貴人、但だ造作すること莫れ、祇だ是平常なり』ということに典拠のことだ。ここにいう『無事』ということは『無事東京に着いた』などという場合の無事ではなく、また何もせず有閑徒食していることでもない。『無事』とは臨済その人の注釈でわかるように、ああのこうのとじながら貞を閉じた。

思慮分別にこだわらずあたり前の事をあたり前にやることである。世間では『面倒臭い』『むずかしい』の反対の意味で『造作ない』という言葉を使うが『無造作』は自然法則に行うこと。これがここに『無造作』の意味である。但し『無造作』といつても、修養せず、場あたりの勝手元の一話集の一頁を思い出した。忙しいという字は、心を亡うと書く。これを縦に重ねると『忘れる』という字になるとおつしやつて。そのとおりいつも心を亡くしている自分を省みて慚愧の思いにかられた。もう数年前、御縁あつて京都のある方から頂戴した三井寺管長大僧正俊謙の落款になる『無事』の茶掛を床にかけやつと落ちつき、自分にかけた。改めてこの軸の二字を見つめてみると不勉強者の自問自答では納得出来得ず禅語の本を開いてみることにした。

『無事』とは『無事是貴人』の事でこれは臨濟宗の宗祖臨濟義玄の臨濟録に『無事是貴人、但だ造作すること莫れ、祇だ是平常なり』ということに典拠のことだ。ここにいう『無事』ということは『無事東京に着いた』などという場合の無事ではなく、また何もせず有閑徒食していること。行のむずかしいこと。次から次へとあげられている禅語の文字を追いながらせめてひとときでも無造作に自然法則に行じて『無事是貴人』になりたいと念じながら貞を閉じた。

土蜘蛛の巣

山崎謡曲同好会

池田大典

子供の頃、旭座で歌舞伎の土蜘蛛を見たびっくりしたことがあります。キラキラ光る衣裳を二回も三回も脱ぎ又元へ戻し六方を踏みながら花道で巣をバツと飛ばす。スルスルと白い糸が無数に延びて観客の頭上に振りかかる。それを何回も繰返し、観客は歎声を上げながら降つて来た巣を引張るがなかなか切れない。その早業と華麗さに見惚れたものですが、後年土蜘蛛の能を習い演じて巣の秘密が判り稽古用を自作してみましたが、なかなか難しい物でした。本物は京都の桧書店で売っていますが、一個千八百円（一千四百円）もする高い消耗品です。これは雁皮と言う薄い上等の和紙の長尺物の端に鉛（電気屋が昔使っていた糸ヒューズ）を糊付してよく乾かしたもので心にして紙がズレない様に固く巻込んで行きます。

八米位巻込んだ所でも一つの端に割箸の様な木片を貼りつけよく乾かしてこよりの様な紐で固く縛ります。これを鋭利な包丁で幅三センチ位に木片も鉛の芯も一緒に荒切し一つ一つをバラけないように更に幅一耗に裁断します。一寸料理教室のハモの洗を作るに似ています。この三センチの紙の棒を五つか七つか交互に重

ね木片同志貼り合わせて指で持つ部分を作り巻封を施したのが巣です。然しこんな面倒な作業を手で作つてはとても値合いませんから適当な機械で作るのであります。演能で使用する時は中味を封の外からよくホグし、紙と紙がくっつかない様捌いて巻封を直ぐ切れる状態で装束の袂や帯の間に忍ばせ逐次投げる訳ですが、鉛の芯が細く軽いから余程上向に投げねば思つた方向に綺麗に拡がりません。

最初の一回目が最も難しく、大部練習を要します。立廻りや舞動の様にドタバタ動き乍ら投げる方がうまく行きます。

この巣は一回切りの消耗品ですから、土蜘蛛一回稽古するのに最低十二個入用で三万円がバアとなり、充分会得するまで

に八回として申合せ本番も加えると、巣代だけで三十二、三万掛る勘定です。

私は自分で工夫して大小百五十程作つて見ましたが、良質の紙や刃物が揃わず出来上つたもので稽古すると、千筋の白糸になるべき巣が十筋の手打うどんになつたり、切れくどんばかりになつたり、それでも半分余りはうまく拡がります。

土蜘蛛は見ている人は面白い綺麗な勇ましい能ですが、演じる方は巣の扱いばかり神経を使って、一寸も面白いものではありません。冷汗びつしょりと言ふところでしょう。

九×九のマス目で四十枚の駒に生命を注ぐ世界が将棋ですが、そのうちの約半分の十八枚が「歩」です。

将棋のことわざに「一步千金」ということばがあります。強くなればなるほど

「歩」の値打ちがわかり「歩」をそまつにすると負けと決っています。

昭和六十一年はプロの将棋界にとって記念すべき年でした。世襲制最後の関根十三世名人から、昭和十年、初代の実力名人位に就いたのが木村十四世名人その人であり、「将棋の日」（十一月十七日）に「盤寿」（将棋盤のマス目八十二）の

ことばがあります。強くなればなるほど

「歩」の値打ちがわかり「歩」をそまつにすると負けと決っています。

昭和六十一年はプロの将棋界にとって記念すべき年でした。世襲制最後の関根十三世名人から、昭和十年、初代の実力名人位に就いたのが木村十四世名人その人であり、「将棋の日」（十一月十七日）に「盤寿」（将棋盤のマス目八十二）の

さて、私事ですが、一昨年は私と私の家族にとって散々な年でした。仕事や家族の入院がつづきと起る悪夢の中でじっと耐える毎日でしたので、その間は

精読とはなかなかいかず、勝負にこだわった、玉を固める「穴熊」また全然守らない「居玉」が大はやりです。

将棋はちょっとしたあい間の「氣分転換」や「頭の体操」として大変有効です。

最近若い人々の間に愛好家がふえつありますが、「将棋」という「文化」に対する認識が高まってきたと感じるのは私だけの目でしょうか。

さて、私事ですが、一昨年は私と私の家族にとって散々な年でした。仕事や

家族の入院がつづきと起る悪夢の中でじっと耐える毎日でしたので、その間は

家族にとって散々な年でした。仕事や

家族の入院がつづきと起る悪夢の中でじっと耐える毎日でしたので、その間は



山崎将棋同好会
杉元正輝

全く将棋は指す気になれませんでした。

けれど、長男の手術のために、前日から病院に寝泊りし、いよいよ長男が手術台に乗せられ、手術が終る二時間あまり

またそれまで長い沈黙の金しばりのよう

な心理状態のとき、ふと、カバンの底に

入れていた、大山名人の本の表を読むと

そこには「忍」と大きく書かれ、勝負は

苦しい時こそ、「忍」の心で、じつと耐えて、時がくるのを待つのだ、というよ

うなほしがきがありました。これこそ、

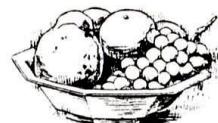
勝負の心だったと私は感動しました。

昭和二十七年に名人になられた、十五世天山名人は三年前、病魔に倒れ入院されましたが、翌年から二年続けて、名人戦の挑戦者になるほどの鉄人ぶりです。

昭和四十八年に現名人の中原誠氏が就き九期連続名人になつたが、加藤一二三九段に敗れ、谷川浩二新名人を経て、現在名人に復位、王座と二冠を保持しています。

アマチュアの将棋は、プロとは違つて実力はプロ級から縁台将棋に至るまで千差万別であつても、のびのびと将棋を指せると思ひきや、その内容たるや、直感

日本人と果物



香川大教授

北川博敏

れているらしい。

日本では、会社の金で社員をアメリカに留学させるというが、本当か。これはアメリカの農務省に勤める友人の質問である。

一体、そんな当たり前のことをなぜ聞くのかと問い合わせた私も、彼の言葉で納得した。

日本人が働き蜂（ばち）の理由がわかつた。日本人は仕事の中に楽しみを見いだしている。奥さんもそれを理解しており、日本人にとって仕事は生活の一部となつていて。

これは、ニュージーランドの科学技術庁に勤める私の友人が、しばらく日本に滞在した時の言葉である。

彼によると、欧米では仕事は金を稼ぐ手段であり、その金で楽しむのが生活である。手段のために生活を犠牲にするという考えはない。

欧米人でも仕事が楽しくなる人がいる。そうなると、結果的に帰宅が遅くなったり、仕事を家に持ち帰ったりする。本人はそれでよくても奥さんが納得せず、離婚の大きな原因になるという。

四年前、私がニュージーランドに二ヶ月滞在した時、美しい奥さんと二人の可愛いい子供のいる家庭を持っていた彼も、これが理由で今は別居生活を余儀なくさ

る。

一もない。

果物、特に柑橘類は、理由は不明ながらも健康維持に必須のものと考えられた。

従つて、欧米では果物は生活の必需品とされてきた。生活の必需品は、多量にあって安いことが要求され、外観などはどうでもよい。

これに対し、飲み水に恵まれた日本では、果物から水を摂る必要はなかつた。

そのうえ、年間を通して野菜が豊富なたまご。社員が自分の金、またはどこかの奨学金で留学することはあるが、会社の金で留学させるようなことはないと言ふ。

社員は会社の財産というのは日本の考え方のようである。

私の専門の園芸の分野でも、日本と欧米では考え方の異なることが多い。最も大きな違いは果物である。

欧米の文化の発祥地は地中海沿岸であるが、乾燥しているため咽喉が渴く。そ

れが多い。このため、果物を食べるには水を飲む代わりであった。

加えてこの地方は緑に乏しく、壊血病になることが多かった。人間は、体内に

貯えているが、一日に五〇ミリグラムほどの必要なので、一ヶ月間余りビタミンCを摂らないと壊血病になる。このため

昭和四十七年以来、その果物の消費量が減少の傾向にある。これは、巨額の宣伝費を投げる菓子との競争に果物が負けているからである。

しかし、果物ほど天恵の自然食品はない。壊血病は問題でなくなつたとはいえがんにも有効なことがわかつたビタミンC、有害物質の排泄作用がある食物繊維、高血圧などを防止するビタミンPにミネラルなどを含み、現代病が急増している日本でも、欧米的な考え方で果物を見る必要度が増えている。

一方、海外、特にアメリカでは日本食に関心が高まっているが、立派な果物を楽しむ日本的な風習も徐々に広まりつつある。

果物に対する考え方方が世界共通になるのは望ましいことであるが、日本の繁栄の原動力になつてゐる仕事や会社に対する考え方方は、今後どのように変わるのであろうか。

（園芸利用学専攻）

日本人は、果物を楽しんで食べるが、嗜好品であるから食べる量は少ない。日本人の一人当たり果物消費量は、アメリカ人の半分、地中海諸国の人々の三分の



「バス酒」のこと

新潮会 藤村清一

昭和三十六年八月。社会評論家の嘉治隆一先生、フランス文学の権威、東京大学教授の辰野隆先生、詩人の富田碑花先生の三人が連れだって山崎町に来られた。

この時、会員の中では私が一番、近在の地理に詳しいだろうと言うので世話を役を務めた。先生らの希望もあって作家吉川英治先生とかかわりがある町内の山崎閑斎屋敷や作州の宮本武蔵ゆかりの地などを案内した。

いち段落ついてから夕食。事前に嘉治先生から「お酒の好きな辰野先生のためバスの葉を用意しておくよ」と聞いていた。これは辰野先生に「バス酒」をのんでもらおうとの嘉治先生の心尽しだったが、私はこのことをすっかり忘れていた。気が付いたときは酒宴の始まる直前。あわててバスの葉を搜してみたものの、どうにもならず、その夜はどうとう辰野先生に「バス酒」をたしなんでもらうことが出来なかつた。いまだに辰野・嘉治両先生に申し訳ないことをしたと後悔している。「バス酒」はバスの葉に酒をそそぎ茎の穴を通して飲むと独特の香りと風味があるという。

昨年の忘年会の席上、山陽盃酒造から

発表された地元の上質米を使って醸造された純米酒「播州一献」のことが話題になつた。辰野先生が生存されておられたら「こく」のあるこの地酒の「バス酒」で、お持て成しすれば、きっと喜んでくださつただろうに——などと思つてみたりした。

新潮会は今年、発会三十五周年を迎えた。会員は実年と、それを超える二十人だが、みんな元気いっぱい。一層の友情を深めながら、昨今は記念行事の計画などにも意欲を燃やしている。昭和二十七年に発会してから約十五年間は講演会や夏期講座の開催など積極的な文化活動を繰り広げた。講師には社会評論の大宅壮一、朝日新聞社論説委員「天声人語」の荒垣秀雄、俳人の中村汀女、写真家の土門拳、神戸新聞社長の朝倉斯道、同論説委員長の畠寺一郎、作家の杉本苑子、東大教授の阿部吉雄の諸先生ら、その筋の権威をお招きしている。

毎月の例会は三十五年間、欠かさず続けてきた。近年は地元の有力講師を招いて講話を聞くなど自己研さんにも努めている。

歴代会長は初代、故前野四郎（元山崎郷土研究会長）、二代、和田秀男（俳人）、三代、藤村省二（歌人）、四代、壱阪壽（山崎町文化連盟会長）、五代、杉元清美（西兵庫信用金庫理事長）の諸氏。

初 心

山崎美術協会

田中 武

山崎美術協会創立以来、会のお世話をして下さっている人に、副会長の福岡久蔵先生があります。まさに、協会を擔つて三十年の人であります。

この先生に絵の指導を受けて絵をかいだ人、また、いまも引き続いている人は小中学生として学校で指導を受けた人を除いてもかなりの人数になると思います。

私もその中の一人で、昭和四十七年からでありますから、もうかれこれ十四、五年來の生徒となります。年数が永いからといって優等生ということではありません。どうにか続いていると言つた状態を反省している者であります。

当時は私も熱心で先生のものは何でも吸収しようと頑張つたものです。教えられることが、一つ一つ身についていくようで一枚一枚が楽しくかけました。中で

もう次の二つのことは今も忘れられません。「もっと筆が伸びるようになると、よくなるけどな」、「ちょび、ちょび、筆で何回もこすると、色が濁つてしまうやう、たっぷりつけて、ぐいっと絵具を置く氣持ちでかいたら」、いたつて初步的な

ことありますが、これで一パンに画が変わりました。一層かくことが楽しくなつたものです。

もう一つは、「画の中心を高く」と言つた 것입니다。私は、そのことを充分理解しているつもりで書いておりまし

たが、その制作途中の絵をみて、「もう少しうやなあ!」「あとになって、なおすんは、えらいでえ!」。結局、二〇号のキャバスで一〇センチ程画面全体を平行移動させてかきあげました。その作品が、学校厚生会主催の奨励賞となつて、私のはじめての授賞作品となりました。

賞などというものは、勿論、ひと様に誉められるようなことはありませんもので、嬉しくて、嬉しくて……

「初心、忘る勿れ。」まさに、その通りでございます。年がたつにつれて、鮮度がおち、制作意欲が減退している昨今の自分を顧みて反省することしきりであります。

忙がしいと言うことは、忙しい人が立派な作品を作られることを思うと理由にならないようです。

新年度は、自分の事は勿論、協公のためにも微力を尽したいと存じておりますので、よろしく御指導・御支援の程お願い申し上げます。

巨星壁

高野圭介

山崎開碁同好会

て叱られましてな。

実は一昨日詩吟の大会がありまして、そ

の審査をひき受けましたんですが、そ

の講評に上手な人を賞めました。

ところが、あるグループのご高齢の方

が来られて『なぜ、わしらのことは無視

しどんや、そんなのは片手落ちというも

んや、片方だけ讃めたら、片方をくさし

たことになるだろ』とね。きょう日、

優等生をつくったらいけん時代やから仕

事ないですけどね。』

前野四郎様が逝つてしまわれました。
何事にも慎重で、果敢で、あるときは強
く、又柔かく、決断の早い人でした。
山崎開碁同好会の会長は「終身刑です
よ」とおしつけたままでした。
ここに開碁を通じて人生を御指導いた
だいた巨星の偉大な言動をお届けして前
野四郎論にかえたいと思います。

「私は九才の時、碁を覚えたんですね。
大正五年六月二十四日、初めて四郎に碁
を教える。四郎九才」と父の日記にあ
るんです。

「いつか、新宮の清水さんが私の家へ來
られたとき『私の方にもあなた位で強い
子ができた。あなたも稽古して強くなり
なさい』と言われた。

なんと、その子がのちの前田陳爾九段
であつたとは知らなんだ。」

「橋本国三郎さん（橋本昌二先生のご尊

父）がうちへよく来られていましたね、
夏来て、うちで浴衣をつくつてあげて、
それを着て近在へ碁を教えに行くのが日
課だつたんですが、秋になり、セルの着
物をつくつてあげていたから、二、三ヶ

「えらい時代になつたもんですね。讀め

つていましてね、よく停電したものです
から、百々ローソク立て打つていまし
た。どうも暗いんで、新宮の帝国電機で
充電する電池を借りて来て打つんですが
この電池の運搬は重かったです。』

「橋本宇太郎先生はバスで山崎に来られ
たことがありますね。つまり、関西棋院
のキヤンペーンなんですよ。』

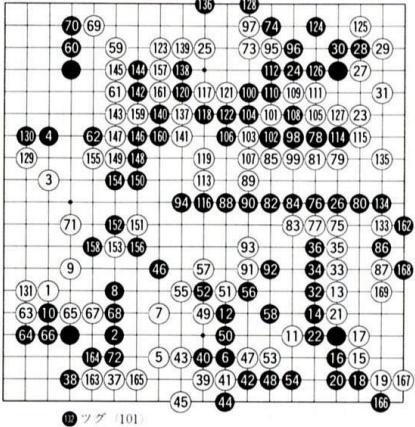
一緒にバスで龍野へ行つたのですが、
バスの中で詰碁の問題をバッパッとめ
くりながら、失題（解けなかつたり、余
詰めの答のあるミスの出題のこと）を指
摘されたのにはびっくりしました。』

「橋本昌二先生はまだ子供だったから飴
をしやぶりながらみんなを負かしたもの
で、たいくつして階段の下でオモチャで
遊んでおられた姿が目に映ります。

もし、置碁でも負けたら、お父様が傍
におられんほど叱りとばされるのです。
それはものすごいものでした。』

昭和46年3月3日 山崎町 正木芳隆宅

●橋本昌二九段 ●四子 前野四郎
169手以下略 黒3目勝



「高野さん、また、さつき碁会です。い
つものように参加賞は清酒八十本ぐらい
でいいですね。この分は寄贈分ですから
お宅まで届けておきます。まあ、よろしく」

「この間の菊花碁会は結べましたか。そ

うですか、まあ結構でした。あとで何や
かやと足りなかつたら言つて下さいよ。』

「碁が弱うなりかけたら危いんだそうで
すね。主人も百才を超していますから、
て下さいね、と大井様の奥様が私に耳う
ちされるんです。最近大井さんは終盤の落ちが多くてね。
さて、言うたもんかどうですかね。』

「この秋祭りに三日間つづけておこわを
喰うたのがいけなかつたんですよ。どう
も胃と十二指腸のところの幽門がおこわ
でつまつてしまふて、食べたものが下へ
行きません。何かハレつてつまつているん
だつたら、それは、つまり、ガンでん
な。』

中国美術交流展を顧みて

宇野裕章

「中国美術交流展」（山崎町教育委員会、山崎町文化連盟主催、中華人民共和国駐日本国大使館、神戸新聞社後援）が、去る九月十一日～十五日の五日間、下村記念館で開かれた。出品されたのは、国画が中国美術協会顧問・沈福文、国協会理事・薰辰生、北京電影学院教授・王超、廣州美術学院長・陳連亨の作品ほか百三十七点、書が中國書法家協会常務理事・林岬ほか六十点、剪紙五十七点、木版画四十八点、油絵など二十点。

中国の国画とは、いわゆる水墨画のことをいう。展示作品はすべて、現在第一線で活躍中の画家の近作。伝統的な手法によりながら新しい創造への意志を感じられて興味深い。墨絵だけでなく、絵の具で補色した作品が数多くあつた。しかしやはり基調は墨である。その自在の構成、潤達な筆勢、自由な線変化にとむ墨色が、見る者的心に緊張と同時に一種の解放感を与えてくれる。精神性と格調を尊ぶ中国美術の真骨頂とも思えた。作品の数では絵画に及ばなかつたが、書の中にも同様な意味で秀逸と思える作

品が見られ、伝統の奥の深さを感じさせた。剪紙には、磨きぬかれた技法の確かながあった。

やはり中国への関心からだらうか、多くの来場者があつた。中国は歴史的に見ても深いかかわりをもつ隣国であり、交流は日増しに活発になつてゐる。けれども現在の中国についての私たちの理解は、まだまだ十分とはいえない。ことに新しい美術に直接接する機会は意外に少なく、たとえば物産展などで見かける従来の型どおりの作品に限られていたのでなかろうか。その意味で、中国美術の現状の一端をうかがうことのできた今回の展覧会は貴重であった。この山崎で開催することができた意義も大きいと思う。

作品は、中国・日本美術交流協会より提供された。この会は、作品交換などの交流による相互理解と友好を目指している。

右は紳士の教養として、広い分野に及んでいた様であるが、今日は歌舞音楽に関する部分が中心で、職業として専門化するようになると、この言葉も狭義に用いられることが多い。

当山崎周辺でも太平洋戦前までは、古典芸能も相当広範囲の人々によって演ぜられてきたが、近時はただ一部分の人達によって、細々と伝承されている状況である。

伝統ある謡曲、詩吟、邦樂、邦舞、民俗的な踊り等々に関心をもち、理解してこの道に精進してくれる、若い大勢の人達が協力してくれないものかと、願うこと切なるものがある。

古典芸能に灯を

山崎邦樂・邦舞研究会

一 福山清

芸能とは演劇、舞踊、音楽歌謡、大衆演芸、映画、民俗芸能などの総称であり、あるいは言葉であるが、今日では見た

が関心も薄く理解し難いのもわかる様な氣もある。このまま放置すれば、永い伝統をもつ山崎の古典芸能が滅びるのではないかと案じられる。山崎町文化発展のためにも、現在の細々とした灯を消してならないと、識者達は大きな不安をもつてゐる。

ち統け、何かよい手段がないだろうかと常に模索をつづけている。

・



第8回秋の芸能祭 郁踊会 大井かな子ちゃん

現代の若い層に関心をもたれない、その原因は何であろうかと考えてみたい。

芸を身につけるには、師について修業し、または独力で研究して身につけるもので、演劇・舞踊の場合は与えられた役の思想・性格・感情の的確さ、音楽ではその曲のもつ感情の情調的確に、しかも個性的に演奏したり、歌う表現技

能芸土郷

宇原の獅子舞

宇原獅子舞保存会

昨年五月に行われた第八回さつきマラソンのアトラクションとして出演し、全国各地から集まつた選手の方々から「山崎町にこんな見事な芸能が」という賛辞と絶大な拍手を賜つた宇原の獅子舞について、概要をご紹介します。

獅子舞は山崎町内では川戸や中野等五個所継承されていますが、特に宇原の獅子は県内でも例の少ない毛獅子で、紺木綿布に馬のたてがみを縫いつけてあります。

雄はやや茶っぽく感

ずるのに対し、雌の方は少し白く見えます。

獅子頭も雌雄対で

あり、いずれもハリコ製で（重さは約二kg）黒うるしの上に

金箔を施してあります

今では黒光りの方が強く重厚さを加えています。勿論、雌雄の顔立ちは若干ちがいます。舞は神樂をはじめ全部で十一種目に及びます。稚児と獅子がわむれる牡丹・吉野や、古い時代の風俗をよく残していると評じられている岡崎、等々ですが、宇原の獅子の代名詞とまでなつてゐる梯子獅子について説明します。

梯子は昔流にいふと三間梯子（長さ六



（志水正信 摄影）

米二本を山型に組んで山になぞらえ、猿二匹に扮する釣手が火消しの梯子のりの様な、アクロバット的離れ芸による先導で、獅子が、笛・太鼓、且つは大衆のかげ声に励まされながら山にのぼつて行き、頂上にのぼりつめたとき、笛・太鼓の調べが莊重な曲に変り、獅子が歡喜の雄叫びに似た神々に捧げる神樂を舞うのです。その舞が雄壯そのもので、見る人々に強い感銘をあたえ絶賛的で、当保存会の誇りがあります。

この宇原の獅子舞は遠く安政年間から伝わる貴重な、伝統ある芸能であり、長く継承せねばならぬと昭和四十八年に保存会を結成し、後継者育成につとめている次第です。

ごねん ごたいぎ
御念の入りて、御大義
——参勤交代余話——
前 田 昇

「旅宿の境涯」、これは江戸時代の儒者「荻生徂徠」が参勤に当る殿様たちに同情して言つた言葉である。参勤交代の膨大な出費は藩の財政を圧迫し、武士たちにも苦しい生活を強いっていたが、それに反して参勤行列の華やかさは、大名行列と呼ばれ、時代の風物詩として、日本の歴史を飾つたことも事実である。

山崎藩参勤交代史料文書のなかに、「東海道駿路御里数録並に御旅中御会釈方御手留」というのがある。書かれた年は不明だが、内容から推して、七代目藩主本多忠敬時代のものようである。

前半の「東海道駿路御里数録」は、山崎藩が指定されていた東海道経由参勤路を、山崎陣屋から江戸浜町一丁目の上屋敷まで、通常一六日間の行程に従つて、駿路一七七町村間の里数・宿場・野立場（休息所）・道中の様子・関係商人などを詳細に記録したものである。

しかしここでの主題は、後半の「御旅中御会釈方御手留」にある。それには、「出立の時 駕籠に参り候節 家老 年寄へ 「随分無事で」と申す事」

はじめまして、江戸屋敷の隣家、奥山殿門前会釈に至るまで、名地での送迎者や、その人たちに殿様が言う言葉の一言一句、さらには、無言の顔見せから、駕籠の戸の明け閉めや、すだれの上げ下ろしに至るまでの細かい所作、行列の供披露箇所などが、詳細に書かれている。

主題の「御念の入りて、御大義」は、参勤の送迎に出た安志藩や姫路藩の町奉行に対する、殿様会釈の言葉である。

文書に見る殿様会釈では、家臣や領民に対しては、その身分によつて、「無言、『無事で』」「随分無事で」を使い分け、他藩の武士や御用商人らに対するは、これまでの身分により、「無言」、「大義」、「御大義」、「供の者大義」、「念の入つて」、「御念の入りて御大義」などを使い分けている。そのほか、尾張の宮の馳走船では、「夜より彼は御苦勞と申候事」、進物持參者には、「只今は念の入つて」、「遠方からの送迎者には、「遠方御念の入りて」と申す計也」などの会釈語も使われている。

この文書からみる限りでは、山崎藩の参勤交代は、毎回同様の繰り返しが続いたようである。万事が儀礼第一・旧習遵守の武家社会のこととはいえ、参勤交代道中の殿様は、自分の意思で行動することは殆ど出来なかつたように思われる。まさか殿様とは、荻生徂徠曰くの「旅宿の境涯」を過ごした人たちであつたといえよう。

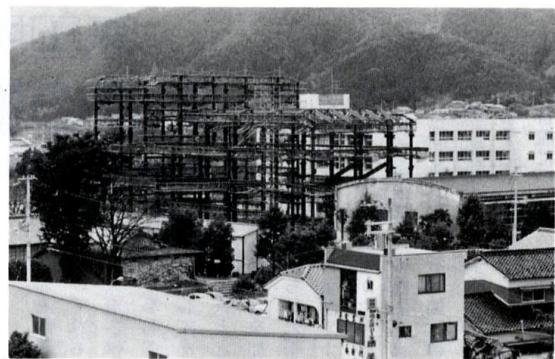
山崎町文化連盟役員及び団体名

会長 壱阪壽
副会長 和田秀男
理事 福山清一
藤井慧乘
福岡久藏
根岸元彦
杉元清美
堀口春夫
朱山毅
谷川道一
金井信治
志水正信
藤村省三
伊野操治
秦耕三
三宅宏佳
平松幹司
杉元栄男
福田栄三郎
菅原恆夫
高野圭介
田中健一
荒木俊介
小川登
伊藤親保
長川耕一
岸本茂弘
三岡ゆか
やまさき文化編集委員



編集長 根岸元彦

すでに新聞紙上などで周知のことではあるが、本誌の執筆者であり編集委員でもある、山崎文学会員の浅田耕三君の作品（首化粧）が、今回（人物往来社）の募集した懸賞小説に当選して（歴史鏡本）誌の新年号で発表された。



建設中の山崎文化会館

山崎文化会館 新築工事着々すすむ

待望の山崎文化会館（六浦郡広域行政事業）は、昨年八月着工、工事は順調に施行されております。

会館の概要

鉄筋コンクリート造三階建

総工事費

三、六四〇坪方メートル
九億円

固定席

七〇〇席

工事完了予定

六十二年十月

会館オープン予定六十二年十一月

北川智恵
根岸元彦
藤村省三
和田秀男

浅田耕三
荒木俊介
安井道夫

北川泰子

大庭清一

伊藤親保

長川耕一

岸本茂弘

三岡ゆか

やまさき文化編集委員

事務局長

顧問

事務局

(アイウエオ順)

同慶の至りというべきで、年末に本誌の編集関係者が寄り集つて、内輪の祝賀会を催したことであった。今後同君の健筆を祈るや切なるものがある。

又これを機として、在町の志ある人士が競つて寄稿され、山崎町の文運が隆昌に向うようがとしたいものと念願する。

特に若い人々に大きな期待を寄せていくのだが、「よし、おれも一つ書いてみよう」と、意欲を燃やして戴くよう願つてやまない。文化とは、小さな事蹟の積み重ねによって、築き上げられていくものであることを、銘記したい。

山崎銘菓 さつき

さつき本舗



洋菓子司 さつき



飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何か、そのようなことを考え「幸福の泉」なるものにたどりつき、自作自演で20数年を歩いて参りました。46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んであります。

当社では、企業は社会の公器でなければならないと常に進言し、流通の世界の中で使命感に燃え、生活文化の向上を願って多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

〈飛石農機(東)〉<トビイシ住設(東)〉<飛石建機(東)〉<飛石レンタ・リース竜野〉

◆最新型カラー現像機導入◆
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店



Specialty Camera Shop
フジアカメラ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎ 62-2089

山交タクシー

山崎 神姫バス西隣

電話 0790-62-2166(代表)

春

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 ☎ (0790) 62-0052

たしかな技術で世界をむすぶ

NEC

兵庫日本電気株式会社

兵庫県宍粟郡山崎町須賀沢231番地 ☎ 播磨山崎 (0790) 62-1222(代)

登録商標

SANYO-HAI

山
陽
盃

兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限会社

高級清酒

名
聲
轟
四
海

登録商標

老松

スエヒロ
オイマツ

老松酒造
株式会社

兵庫県山崎町

老松酒造有限会社

地元にひろがる

心のふれあい

にしじん



西兵庫信用金庫

理事長 杉元清美